

338-3231

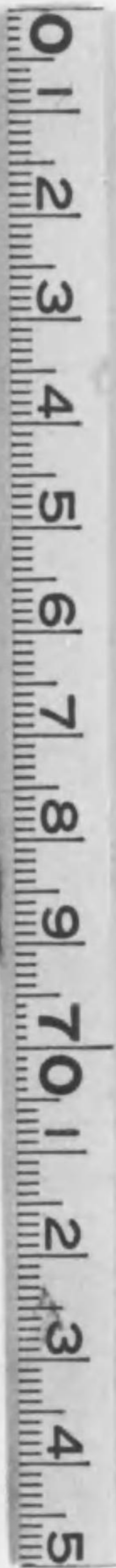


1200501395464

338

3231

〇  
複  
写



始





338-3271



十  
曲

大正  
12. 8. 24  
内交





### 此書を岩下清周翁に獻す

此書のやうな文學的作品を貴下に捧げるさいふこころは、餘りに突拍子もない、いさゝか奇を好むやうに考へる人もあるかも知れませぬけれど、私に取つては、中々に思出の多い深い縁があるのであります。此書の刊行に就ては何は扱て置き、先づ第一に貴下に捧げなくてはならぬ義務があるものゝ確信して居るのであります。

私の會社は貴下のお蔭によつて此の世の中に生れて來ました。私の會社は（千六百何十人の株主を有する株式會社を、私の會社といふのは不都合であるかも知れませんが、然しさういふ法律論を離れて、私はいつも私の會社を思つ



て居る習慣を見逃して頂きたい) その私の会社はもう丁度十年前になります、拾壹萬株の中、約五萬株の引受手が違約して、設立が行惱んで、發起人であつた舊阪鶴鐵道會社の重役諸君が解散しやうとして居つたのを、私が一切の責任を負担して引受けてから、貴下の御厄介になつたことは、實に非常なものでした。貴下の御親交のお方や、又私の先輩である甲州派のお方々にも御願をしたけれども、到底も滿株の見込が立たなくつて結局其不足分を北濱銀行で御引受下すつた爲に、私の会社は設立が出来たのであります。それから今日迄開業して既に七年。貴下のお指圖のもに計畫せられた凡てのものは、見事に成長して居るのであります。日本に初て試みられた住宅經營の事業は理想的に發達して來て、獨り會社直營の分言はず、他の會社や有力なる個人の經營地も十數箇所に達し、具體的に營利に伴ふ社會政策の一事業として

識者の注意を引くやうになつて來ました。近き將來に於て阪神海岸線及山手線の兩電鐵と連絡すべき西寶線の竣成と共に、阪神間唯一の樂園となるべき地の利を得てゐる寶塚は、やがて電鐵統一の曉には、單に温泉の町としてのみならず、あらゆる遊戯場の統一的中心地たるべき運命を有つてゐるから、茲には永久的の設備が必要であるを申された、其武庫川の清流に沿ふて建てた日本第一の宏壯なる新温泉は、營利事業としても、既に存在すべき價値を證明するやうになりました。此新温泉の餘興場に、初て生れて、まだ勿論未成品ではあるけれど、兎に角大阪の新名物として一般から望を囑されて居るものが、即ち此少女歌劇であります。貴下に見て頂くここの出来ないのがみんなにか残念でせう、さうして奇想天外より落るやうな御批評を承はるここの出来ないのが實に残念でなりません。



嗚呼少女歌劇！實業家として立つ私の四圍の同人間から見れば、何たる馬鹿氣た、呑氣な仕事に没頭する愚さよ、笑はれるこゝも知らぬではありません。然し此少女歌劇を育てるこゝが、其過去に於てごれほご私に慰安を與へたでせう。没義道な世間に對し、輕薄なる輿論に對し、一種の反抗心を有して居つた私は、少女歌劇に没頭するこゝによつて、貴下の攻撃者に對し、恰かもモツブのやうな傍若無人の群衆に對し、其當時、冷靜を保ち得たこゝも、信じて居ります。貴下あるゆゑに大阪に其の存在を認められるに至つた多方面の方々の中には、貴下にお近づきのあるのを光榮とした昔を忘れたやうに、あらずもがなのお噂を、我が社交界の中心に於てきかねばならぬ時、わたくしはいつも寶塚の講堂に於て、可愛い生徒の聲樂に凡てのものを忘れたのであります。

自分の進む爲に人を倒さなければならぬ悲むべき實業界の君子人は、他の蹟くこゝによつて狼よりも猛き牙を現はすのであります。投機の強弱に利用する人、取つて代らんご企てる人、自から放火して其消火に盡力せんごする人、あらゆる機會を捕へるに鋭敏なる諸氏の行動を今日になつて願れば、活動寫眞のやうな長いヒルムが、虚偽ご欺詐ごさうして自己本位に暗闘したのであります。貴下は實に一世の誤解を受けて、其事業の犠牲に沈落して、既に精神的に死んで居つたにも拘らず、輕薄なる輿論の無情なるご、正當なる判斷を許さぬ群衆の嘲罵は、一言半句の辯解を許さなかつたのであります。然し、時は凡てのものを解決してくれま、熱せるものは冷かに、冷かなるものは公平に、而して最後の公平なる批評はやがて歴史家をしてうなづかしむるに違ひない。私は貴下の常に斯ういはれて居つたのを記憶してゐる。『百



歩先の見ゆるものは狂人扱にされ、五十歩先の見ゆるものは多くは犠牲者となる、十歩先の見ゆるものが成功者で、現在を見得ぬものは落伍者である」云。思ふに時代の犠牲となつた貴下から見れば、何等辯解の必要はないでせう。私は又或る時機に於て、大阪の經濟界から見た貴下の立場に就て、最も明瞭に語り得る人は他にあるを知つてゐる。私は只だ、私の事業も、私の事業に關聯した電鐵の計畫に就て、今やそろそろに貴下の先見の明あるを思ふの興味を禁じ得ぬのであります。

某新聞が最初に貴下を攻撃した烽火は、實に大阪軌道を目して亂暴なる計畫と言はれたことでもあります。其大阪軌道は開業未だ三年を出でずして、最近の決算に現はれたる半期間の純益は參拾四萬四千四百九拾七圓であります。假りに建設費を八百萬圓にしても、優に八朱五厘の利廻りになつて居ります

から、確實に七朱の配當の出来る立派な電鐵であります。大阪軌道の様に新式で、時代に魁けた他に類例のない立派な建設の電鐵が、八百萬圓以内で出来上つて居る、それにも拘らず世間の輿論は、此電鐵さへも危険視したのであります。鐵道といふが如き種類の事業は、眼前必要が差迫つて来て直ちに敷設せよといふが如く、足元から火の出る様に建設すべきものでない、時勢を達觀して其將來の必要に適應する計畫によらざれば不經濟なりといふ御意見は、阪神山手線にも又適用が出来るかと思ひます。其阪神山手線の敷設權を此度私の會社が買収しました。私は此機會に於て貴下の御腹案であつた近畿電鐵統一論を回顧したいと思ひます。私の會社の梅田の正面の立關先を中央停車場として、東は野江線にて守口より京都行、西は十三より阪神山手急行線にて神戸行、西宮寶塚間、伊丹尼崎間を營養線として連絡し、現在の阪



神海岸線及び、天満守口間北大阪線を市街線とし、箕面寶塚線を支線としたる京阪神間電鐵統一の貴下の理想は、夢のやうな運命と共にまほろしの消ゆるく様に消えました。野江線は既に大阪市の經營に移りました、足をきられ手をきられた空想を離脱した私の小さい心に悶ゆる波動は、バラダイスの空間を占領する美妙なる旋律によつて僅に和らけらるゝより外に途は無かつたのであります。可愛い少女の唄ふ小鳥の囀や、花の様に舞ふ羽衣の長い袖や、無理にも泣いて見たいと思つた悲哀な音樂に不自然の快感をむさほらざるを得なかつたこゝもあつた、その我が少女歌劇は、私をして拙い文筆を馳らすやうな境遇に暫く安んぜしめざるを得なかつたのであります。

時は凡てのものを解決してくれます。貴下の理想の一部であつた阪神山手線敷設権は、棚から牡丹餅のやうに私の會社に飛込んで來ました。灘電鐵の

権利は、新に社長となつて私を鞭達し指導して下さる温情深い平賀翁の厚意を無にした、今西翁の斷念によつて、私の會社が引受けるこゝになつたのであります。其結果として私は、此會社を設立した十年の昔の時のやうに、毅然として凡ての責任をあらゆる壓迫に對抗すべき決心を必要としたのであります。私の會社は梅田神戸間を本線としたる急行電鐵を目的として其計畫を遂行しつゝあるのであります、箕面有馬電氣軌道株式會社といふやうな田舎臭い名稱は、遠からぬ中に阪神急行電鐵株式會社と改稱すべき運命を有するのであります。さうして近畿電鐵中の偉大なるものに完成するこゝによつて、貴下に對する報恩の一部をつぐなひ得るものも確信して居ります。貴下のお蔭で出來上つた此會社が、新に貴下の御理想であつた一部の事業に着手すべき機運に際會したる時、貴下の残せる事業と其人格との真相が漸々に明



かならんミして來た時、私は偶然にも此書の刊行によつて、貴下に御禮を申  
上げる光榮を有したいと思ひます。

大正六年十一月

小林 一三



小林一三著

歌劇十曲

寶塚少女歌劇團



## 『歌劇十曲』の首に

▲西洋の歌劇は斯々いふものである、こいふ六ヶ敷い定義の上から、寶塚の少女歌劇を批評したならば、これを歌劇こいふのは勿論無理であらう。全體西洋のやうな歌劇が果して我が國に生れ得るであらうか。まだ、日本に完全に發育して居らぬ、聲樂本位の劇を、上演するに當つて、帝國劇場や、ローシイ一座が試みるやうな、西洋の曲の歌詞を、直に日本語に譯して演ずる其不自然な、不調和な行爲は、當然失敗に終るべきものこ信じて居る。然らばこいふならばよいかこいふ大問題に就ては、門外漢たる自分は之を斷定的に言ふほどの勇氣はない。然し、自分はかういふ疑問を抱いて居つた。「人心を支配する點に於て、宗教も音樂も殆んど同一であるこいふ位重要視すべき音樂に就て我國民は頗る冷淡であつた。信教の自由を憲法によつて許されて



る我國民は、何等の研究なしに、其音樂は西洋樂に強制的に限定せられた結果として、我が國民の義務教育の中には、特に唱歌なる一科目が設けられて、幼稚園はもとより小學校及それ以上の學校に於ても「君が代」「鳩ほつほ」と共に唱歌が教へられ、其唱歌に伴ふ音樂はピアノ、オルガン等の洋樂であるから、あらゆる國民はドレミファソラシドの音律によつて其聽感を養育せられて來たのである。而して、現在の唱歌の唱ひ方が、果して我國民性の自然の發露に適したものであらうか。それが善いか、悪いかといふ様な疑問を超越して、「君が代」の歌ひ方が果して新興國民に對する天與のリズムであるや否やを研究する遑もなく、我々は、既に何か解決せなくてはならぬ、實際問題に逢着して居るのである。即ち、西洋音樂を基礎として其聽感を養育せられて來た青年士女は、學窓を離るる同時に之を味ひ、之を樂むことは、

出來ないではないか。學校を離れてから味ふべき音樂的藝術は、三絃樂を主としたる長唄常磐津淨瑠璃等の如き、親しみのない、縁遠い、聞いても判らない藝術より外にないのである。實社會に没交渉な西洋音樂を基礎として養育せられて來た青年士女にまつては實に不幸と言はねばならぬ。この不幸の青年士女の爲めに、さうしても、其思想と趣味に共鳴すべき洋樂を基礎とした或物を提供するのが急務である。清新なる娛樂としても、精神的修養の方法としても、趣味の向上に、處する手段としても、時勢の要求は此目的に添ふべき或る藝術の存在を促して居るに違ひない」。

▲そこで六ヶ敷理窟を離れて、第一に手輕なもの、維持し易きもの、さういふ方針を取つて、十四五歳の少女のみの一團隊を集めて、大正二年七月寶塚少女歌劇養成會といふものを組織した、作曲は安藤弘氏三善和氣氏聲樂は安藤



夫人、原田潤氏、器樂は高木和夫氏、振付は久松一聲氏、これ等の諸先生の熱心なる指導によつて初めて之を寶塚のパラダイスに於て公演することになつたのである。幸に大阪市民の賞讃を博して、今日では古典的藝術の泉源たる文樂座の人形芝居と相俟つて、洋樂を基礎としたる新興藝術の搖籃地として我寶塚の少女歌劇は、大阪の新名物となつて居るのである。少女歌劇脚本集の如きも發賣部數既に七萬冊を超過して居る盛況である、其脚本集の序文に俳優松本幸四郎氏はかういふことを書いて居る。

「一兩日前に福澤捨次郎先生にお眼にかゝつた時、先達て大阪へ行つて寶塚少女歌劇を見物したが中々面白い。必ず参考になるからは是非共大阪へ行つて來い。と言ふ御注意を受けました。そこで急に見物することに決心しまして伊阪帝劇幕内主任と一緒に出發することにりましたが、御大典に差迫つて

居る爲め汽車が混雜で座席が無い。止むを得ず横濱から神戸迄汽船で参り神戸から大阪へ大阪から箕面電車で寶塚へ参りまして見物いたしましたのであります。私が見ましたのは御大典に因みて新に作曲せられた「日本武尊」に「メロリーゴラウンド」「三人獵師」「音樂カフェ」の四幕でありました、花のやうな可愛らしい娘さんばかり中々能く覺ゆ込んだものご感心いたしました。單に技藝に就て其巧い拙いを言へば多少の缺點はありませうけれども、何を云ふても日本で初めて組立てられた新しい歌劇、日本の藝術界に新生面を開いた創業的光明が東京にあらずして大阪の寶塚、而かもそれが専門家の手によらずして箕面電鐵會社の娛樂場に於て生れたといふ事は、實に感慨無量に堪へぬのであります。

私はわざ／＼遠方より見に來た甲斐のあるのを喜んで居ります。東京の帝



劇で時々開演します歌劇よりも立勝つて居る點は、帝劇のは何處までも西洋の作曲のまゝで、日本語に翻譯した歌詞を唄つてやるのですから生硬を免れませぬけれど、寶塚のは作曲も歌詞も純日本式の創作ですから非常に振に合つて居ますし、振も亦腰から下の運動はオーケストラの西洋樂に巧く合ひ、腰から上の運動は日本の舞踊を器用に取り入れて此二つが目立たないやうに混和されてあるのは實に感心です。簡單に批評は出來ますけれど、こゝまで組立るさいふ事は矢張天才でなければ出來ない仕事であります。

「音樂のカフェー」、「メリーゴーラウンド」は新らしい云ふ意味で面白く見ました。「日本武尊」も「三人獵師」は純日本式舞踊の型に没入しないところが手柄です。三つ拍子の作曲があるのに之を四つ拍子にして用ひつゝあるのが日本の音樂の缺點です、私はさうかして三つ拍子を用ひたいと思つてましたが

少女歌劇を見物いたしましたして既に其曲中に三つ拍子が巧に用ひられて居るのは殊に嬉しく感じますと同時に、之を活用した手腕に敬服するのであります。』  
▲斯くして追々世人の注意を惹くやうになるも、又いろ／＼の註文が出て來た男聲を交ぜなくてはいけない。唱歌本位ではいけない、其作曲は内容的では困る、形式的にせよ、向上發達の途は斯々せねばならぬ云ふ様な堂々たる意見が各方面から現れて來るやうになつた。自分は此親切なる注告を受けて、實際、何うしたならばよいか迷つて居るのである。

▲歌劇としての理想論を離れて、此幼稚なる歌劇に對し、現在歡迎せられて居る主なる理由を言へば、其歌詞が徒らに優美絢爛に流れずして、直に了解せられ得る平凡なる調子であると同時に、其唱ひ方が、オペラ式でなく、學校の唱歌を楷書させば、是をくだいて草書にしたやうな唱歌の唱ひ方を選ん



だこゝであらうと思ふ。然しこれはオペラ式に唱ひ得る音量の豊富なる唱ひ手が少ないから、勢ひ此程度に従つたのであるが、偶然にも、聴衆の方も、又此程度を歓迎して居る様子を見るに、聊か心細く感ぜざるを得ないのである。小林愛雄氏は「軍歌でなしに、學校の唱歌でなしに、三絃樂に伴ふ俗謡でなしに、私達が高唱に價する歌がありませうか。これを考へる時に、私達の智識の負擔の重に失して、片輪に育つ今日の青年を氣の毒に思ふのである。」と言はれて、自から進んで、夏の朝野道を遠くわけ行く時、冬の夜はストーブのほそりに、教室を離れ、軍隊をはなれ、料理屋を離れて歌はるべき唱歌を作らうと志して居らるゝといふ其目的は、少くも寶塚の少女歌劇の唱歌によつて其片鱗を見るこゝが出来ようと思ふのである。而して、其唱ひ方よりも尙現はれたる舞臺上の効果は久松一聲先生の考案によれる振付である。

新しき舞踊——或はこれを舞踊劇と言ふこゝを容認して貰へるかも知れぬ——其動作には、西洋のダンスを離れずして、而かも、寧ろ日本の舞踊に近く丁度、坪内士行氏の言はれた「西洋の舞踊の多くが其律呂を主にするダンスであり日本人の舞踊が表情を先づ主とするマイムである所から、ストラウスやワグナーの一部の曲が盛に騒音を使ふところから非音樂的であると同じ意味でまるでダンスは思へない」と云はれるのであるし、それと反對に我々日本人に取つては、西洋の舞踊の多くがお一チ二の調子ばかりで、あまり體操と區別がないやうに思はれるのであるが、之等兩者は當然打つて一丸とされ得べき、又しかさるべき運命を持つて居るものであつて「云々」言はれた。其御希望通りに打つて一丸となりつゝあるこゝ、即ち餘りに散文式になつた通めいた日本の舞踊と、律呂に囚へられ來つた西洋舞踊とは、ニジンスキーを待



つ迄もなく、或點迄は、寶塚少女歌劇によつて糾はれんとして居る點が青年士女の思想に共鳴してゐる様に思はるゝのである。

▲本編は寶塚少女歌劇の爲めに自分が書いたものゝ中から十種だけ選んだのであるが、所謂低級にして幼稚なりといふ批評を受くるであらう。然し、日本に初めて生れた日本的歌劇の初めての作品として、他日何等かの参考になるかもしれないと信ずるから、實は、我が寶塚少女歌劇の生徒、で舞臺の人たる十四五歳の可愛らしい少女も、いつのまにかに、十七八の花のやうな娘になつた、此先さういふ工合に變るか、又必ず變るべき運命の下に迫つて居るやうに思はれる自分にまつては、此書の刊行によつて、或る一時代を劃すべき暗示を與へられたやうに思はれて、一入愛惜に堪へぬのである。

大正六年八月

小林 一三





「寶華女學校音樂會練習」



# 歌劇十曲目次

歌劇	日本武尊	.....
歌お加	兎の春	.....
悲歌劇	『リサール』博士	.....
歌劇	雛祭	.....
同	竹取物語	.....
同	『ダマスクス』の三人娘	.....
同	松風村雨	.....
同	桃色鸚鵡	.....
歌お加	大江山	.....
歌劇	夜の巷	.....



劇歌  
日本武尊

光臨十曲且木

第一 大江山  
第二 大江山  
第三 大江山  
第四 大江山  
第五 大江山  
第六 大江山  
第七 大江山  
第八 大江山  
第九 大江山  
第十 大江山



登場人物

日本武尊

川上兄梟帥

川上弟梟帥

日本武尊從者

會族

少女

二名  
四名  
一名

場所

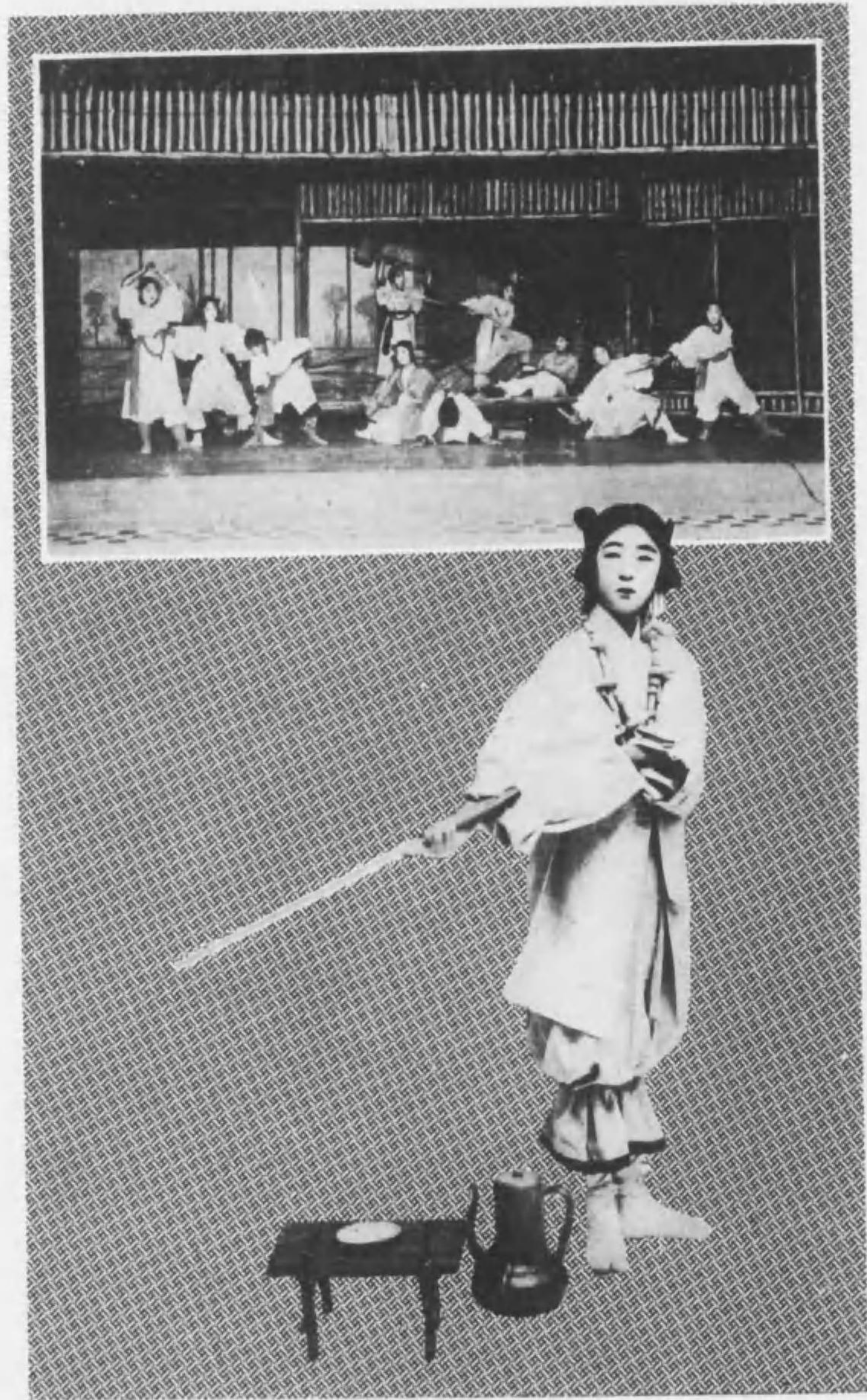
熊襲川上梟帥兄弟新殿

「日本武尊」

日本武尊

雲井浪子





「日本共舞」

雲井露子



曾族 甲 乙

甲 「我君川上臬帥の長狹、熊襲一圓を主しめして御館の新築、美しい事ではありませぬか」  
乙 「國遣縣主も、物かは、比ぶものなき臬帥の君の御威勢、筑紫の海の際もなく波も靜に治  
まねる、熊襲の天下。」

甲 「四邊に震ふ阿蘇の鳴動、おぶく煙の靡くやうに、肥の國はもこより、日向高千穂、やが  
て海を渡つて三ツ子の島、伊豫の二名の島に到るまで。」

乙 「熊襲の威勢を輝かさんす臬帥の君の御大望。」



甲 「四邊の豪族を語らう御酒宴もあつて、美眉よき少女を驅り集め、興を助けよこの仰せ。」

乙 「手落なく取計らうて、お譽に預り度いものぢや。」

甲 「彼は言ふ中、もう御出座の時刻であらう、早う用意をせすばなるまい。」

甲乙 「ドレ、仕度にかゝるごせうか。」

(ト二人酒宴の用意にかゝる)

兄梟帥 獨唱 「筑紫の海の幸多き

日向高千穂棚雲の

串觸嶽の幸多き」

弟梟帥 獨唱 「笠沙の御崎沖晴れて

あゝ朝日の直す國

あゝ夕陽の日照る國」

兄弟合唱 「筑紫の國も今は我

熊襲梟帥のものなるぞ

熊襲梟帥のものなるぞ」

(兄梟帥は弟梟帥及曾族二人從へて登場)

弟梟帥 「皆のもの御苦勞であつた、酒宴の用意滞りなく出來たであらう。」

甲 「仰せの通り用意萬端整うて御座る。」

△ 「誠に見事なる館の御造營。」

△獨唱 「軒端に雨の雫なく」

□獨唱 「廂に迫る風もなく」

甲獨唱 「太陽は輝くも慈の蔭あり」

乙獨唱 「月は照せど露にぬれず」

△詞 「熊襲御殿の美事なる。」

甲 「一同祝着に。」

四人 「存じ奉る。」



兄梟帥 「大儀に思ふぞ、既に我此國に在つて領る上は、筑紫は熊襲梟帥がもの、御身達はもなほさす國造縣主。」

□ 「誠に我等は。」

四人 「國造縣主。」

弟梟帥 「實によ、國造縣主。」

□ 「かたじけない次第で御座る。」

弟梟帥 「先づは祝着、何はさて置き、お喜びの酒宴をいたさう、少女達をこゝへ申せ。」

四人 「かしこまりました。」

甲 「里の乙女我君様の。」

四人 「お召で御座る。」

少女合唱 『今日はいよいよ日ぢや火の國の

山の煙の化粧

水の流れも靜かなる

川上梟帥同胞は

こゝろ筑紫のお酒盛

乙女の舞の綾衣に

大和童男の隠れたる

敵ありとも知らぬ火の

御代を祝ふぞ愚なる』

少女六人(中に日本武尊あり)登場(此合唱の初まる時より酒肴運ばる。)

尊 「新みあらかのお祝ひに。」

少女 (一) 「御世を壽ほぐしるしの花籠。」

一同 「お笑ひなされて下さりませ。」

弟梟帥 「よくも揃うた里の乙女、花よりも美しや、ズンミ參つて皆へ酌をするがよからう。」

△ 「これは又あでやかな乙女達、新御殿のお祝ぢや、遠慮なう頂くさせう。」

□ 「浪々酌を頼まうぞ。」



少女等 「畏まりました。」

甲 「はてあでやかな。」

従者一同 「姿であるわい。」

(少女達お酌をする)

甲 「なう、乙女達、川上梟帥殿は、これからはこの新殿にお直りあつて、熊襲一圓の大君ぢや、幸多きお身らの中にも、やがて嫡妻<sup>あひかりの</sup>を敬はれる御人<sup>ごじん</sup>もあらう、(ト一際<sup>ひときは</sup>日本武尊を見詰め

る) 随分精出して御酒のお相手をするがよからう。」

乙 「乙女達、今こなたの言はるゝ通り、川上梟帥殿は筑紫の王様ぢや、この御殿の宮柱、君萬歳の御盃、一ツ受けて下さらぬか。」

少女 (一) 「有難く戴きます。」

兄梟帥 「そこな乙女に盃取らさう。」

(ト日本武尊を手招く)

尊 「あの、私に、有難う御座ります。」

弟梟帥 「ついで見なれぬ美しい乙女ばかり、熊襲の國も幸多き國ぢやわい。」

兄梟帥 「そこな乙女、近う進みやれ、ナント乙女達、今日は新殿の御祝、自ら申すも異なこゝながら、これより我等兄弟は熊襲の王ぢや。」

(ト云ひ乍ら日本武尊に盃をさす)

弟梟帥 「そち達の望みこあらば、何なりこも叶へさす、遠慮なう願ひ出づるも、また酒宴の興こ申すもの。」

兄梟帥 「望みがあらば早く申せ。」

(日本武尊盃の酒を少し飲む)

尊 「御位の御祝、新殿の御喜び、梟帥様の御武運、君萬歳を御祝ひ申上ます。さりながら承りますれば、彼の大和の國には帝の御位に即かるゝには、その御印として、神代よりの御寶、傳へ傳へられて、これ無くば如何に武勇勝れさすとも、一國を主すなごはさらく思ひ設けぬこの事。」

兄梟帥 「何こ申す。」



弟 「國王たらんこするものは、神代よりの寶がいるこ申すか。」

尊 「左様に聞及びまする。」

弟 「其寶は如何なるものぢや。」

尊 「三種の神器を申すさうで御座ります。」

弟 「その三種の神器をやら言ふものがなければ、此國を主す事は叶はぬを申すのか。」

兄 「フム、不思議な事を聞くものかな、弟臬師。」

弟 「兄臬師。」(と思案する)

弟 「神器がなうては叶はぬか、其三種の神器をやらは、如何なるものを申すのぢや。」

尊 「先づ第一に八咫の鏡、八阪瓊の曲玉、天叢雲の劍、この三つを名づけ三種の神器を

申しますか。」

弟 「ふむ、して其理由を申すのは。」

尊 「鏡の如く分明なるをもて、天が下に照臨し玉へ、八阪瓊の廣がれる如く、曲玉を以て天

が下をしろしめせ、神劍を提けては順はざるものを平け給へ、天照大神の勅。」

弟 「して、天照大神の勅ありての後は。」

尊 「そもく鏡は一物をたくはへず、私の心なくして萬象を照すに是非善惡の姿忽ちにしてあらはる、其姿に従ひて感應するを徳とす、是鏡の源なり、玉は柔和善順の徳を備へて慈悲を象る、劍は英武決斷を徳とす、智恵の本源なり。この三徳をうけざる時は天が下を治め給はん事難かるべしとの勅あつて、豊葦原の水穗の國は、汝が治むべき國であるを、子孫々に申し残されましたさうで御座います。」

弟 「して、そのやうな寶物が如何にして得られたるか。」

尊 「幸ひの御酒宴、御座興までにお物語いたしませうか。」

兄臬師 「その物語聞くであらう。」

甲 「三種の神器の物語。」

乙 「これは一段さ。」

四人 「面白うなつたわい。」

兄 「先づ第一が八咫の鏡。」



弟

「八阪瓊の曲玉こは。」

尊

「神代の昔天照す大神の御代こかよ。」

尊獨唱

「天の浮橋雲の峰

高天原に神榮ゆ

伊弉諾伊弉册の尊の御子にて

天照大神の弟は

素盞鳴尊と呼び玉ふ」

少女合唱

「心も猛く暴し

いつも尊は大神を

苦しめ玉ふ亂行に

天の岩戸に忍ばれて扉を堅く閉し玉ふ」

(間奏)

「世界は常闇

百鬼は横行

八百萬の神々は

天の安河に集ひして

智恵者の神に

再び此世を照らし玉へと頼みける」

尊獨唱

「智恵者の神の思兼の命の云ひけるは」

少女合唱

「天の香具山眞榊の

上の枝には玉をかけ

中の枝には鏡をかけ

青和幣白和幣、長鳴鳥と諸共に

太諄辭を捧げばや」



少女 獨唱 (一) 『石凝姥命には』

天の香具山の金を掘て造らせ玉ふ八咫の御鏡』

少女 獨唱 (二) 『玉祖尊には』

八阪瓊の五百津御統の珠を造らす

これぞ八阪瓊の曲玉なる』

尊 獨唱 『天兒屋命には』

天の岩戸の大神樂』

少女 獨唱 (三) 『鈿女の命は舞狂ふ』

少女 獨唱 (四) 『強力無双の手力男命が控へたる』

少女 合唱 『長鳴鳥の面白や』

八百萬の神々は

手拍子足拍子

高天原にとよめき渡る』

(少女四人、日本武尊を中心として舞ひ來り、此合唱が終るとオーケストラに合せ、岩戸神樂の無言劇式振事に、四人の少女を活用す、岩戸神樂式オーケストラには、時々コツケコツコウの鶴のコーラスを交ぜる)

少女合唱 『岩戸神樂の賑かさ』

天照大神は暫し細目に明け方の

此世の光り朝日さす

天の岩戸の物語』

尊 「八咫の鏡と八阪瓊の曲玉の物語、拙き業のお笑ひ艸、御許しなされて下さりませ。」

甲 「拙き業と言やるが、中々に面白かつた。」

乙 「如何様、理由ある鏡と玉の物語、かういふ寶物が熊襲に無うては残念至極ぢや。」

四人 「羨ましい話ではないかなう。」

弟 「成程、八咫の鏡と八阪瓊の曲玉、誠に羨ましい御寶であるわい。」



兄 「して又叢雲の劍さいふは。」  
尊 「これは又興ある物語。」

(ミ物語になつて舞ふ)

少女合唱 『サテも其後、素盞鳴尊は

新羅の國より出雲の國に渡り來りて簸の川岸に佇めば  
箸一つ、水のまに／＼流れ來る

里こそあらめと行くほどに

山の麓に藁屋あり』

尊 「簸の川上の一つ家に燈火もれて泣き叫ぶ女の聲の慘しや。」

少女合唱 『様子あらむと尊には

笹の折戸を片寄せて  
媼にすがる早乙女の

花の姿をいたはれば

風に散らんず風情あり』

尊 「我は大山祇の神子、可愛い一人の小娘は栴檀田姫と申ける。」

少女合唱 『もと八人の同胞も

一年毎に一人づつ』

(間奏)

『可愛い娘は高志の山

八股大蛇に七人は

吞れつくして影もなし』

尊 「川風誘ふ青嵐。時は來れり月の夜に。」

少女合唱 『残る一人の小娘も

今日か明日かと松の影  
檜杉など老い繁る



苦のむしろの大蛇には  
頭八つに尾も八つ  
八股大蛇のおそろしさ』

(間奏)

少女合唱 『出雲八重垣八雲立つ』

其八重垣を尊には  
櫛稲田姫と妹と背の  
千代を誓ひの睦言に  
大蛇退治の勇ましく  
簾の川上に遡り  
八つの船に盛る酒の  
いろは鏡と輝きぬ』

いろは鏡と輝きぬ』

(間奏)

少女合唱 『櫛稲田姫は山の上』

八つの船に盛る酒の  
鏡にうつる花の顔  
櫛稲田姫とあやまりて  
八つの船に八つ頭  
呑む間程なく酔ひ伏して  
高志の山をば越わかねつ  
簾の川上に倒れたり』

(此間日本武尊少女四人をからみて舞ふ)

兄鼻帥 「あ、乙女暫し待ちや。」



尊 「何んぞ御座ります。」

兄 「ものすゞき大蛇物語、きつう惱みを覺ゆるぞ、酒ぢやく。」

(日本武尊御酌をする)

弟 「如何にも素盞鳴命は勇者であるけな。栴稻田姫のいたいな話、戀に落ちて愉快ぢやの。」

甲 「其叢雲の劔の理由、それは何ぞいたした事で御座らう。」

尊 「叢雲の劔はこの八股大蛇より得たるもの。」

兄 「何ぞ言やる。」

尊 「大蛇は酒をたしなみて、八つの船に八つの頭、呑む程に、呑む程に。」

弟 「きつう酔うたぞ申すのか。」

□ 「大蛇が酒に酔うたぞは。」

△ 「前代未聞の語草。」

兄 「イヤ、酒にも酔はう、大蛇ならねぞ我も酔ふ。」

(兄又盃を出す、日本武尊酌をする)

弟 「酔ふた大蛇は如何に致した。」

尊 「酔ふた大蛇の眼の色。」

(ミキツト兄鼻帥をにらむ)

尊獨唱 『八つの頭に十六の

赤く輝く眼光は

爛々として物すごし』

(間奏)

少女合唱 『息吹く時は腥き

風に巨木の倒れ伏し

とどろく轟けは

響は高く宇迦の山

底津岩根もゆるぐまで』



(間奏)

少女合唱 『遙かに黄泉比良阪に』

つづく闇路の夜はふけて

寢息窺ふ尊には』

(此時兄鼻帥も弟鼻帥も酔が廻つてうつらうつら眠る。)

尊獨唱

『十拳の劍ぬき放ち』

岩も通れど刺し通す』

(激しき間奏、其間立廻り、日本武尊は兄鼻帥を刺す、其物音に驚いて弟鼻帥は眼を開いて起き逃げんとするを尊は又忽ちに是を刺す、甲乙□△周章狼狽の體たらく。)

兄鼻帥

(手負ながら)「暫し、暫し、待たせ玉へ、御方は何もの、名のらせ玉へ。」

尊

「オ、我こそは纏向の日代の宮に、大洲しろしめす大帶日子淤斯呂和氣天皇の皇子、名は日本童男ご申すもの、汝兄弟朝意に反き皇命を奉ぜざるにより、征伐せよこの勅命によつて参りたり。」

兄鼻帥

(苦しき中に畏まつて)「さては尊き御方にてありしか、西の方筑紫の國には某兄弟に及向ふもの今日迄一人もなかりしに、東の方、大和の國にはさても猛き御方おはします哉、されば、恐れながら御名を献り申さむ、ゆるし玉へ、尊は今より後日本武尊ご名のらせ玉へ。」

尊

「いみじくも申しつるかな、日本童兒の武、我ご思はむものは出合へく。」

(ご日本武尊兄鼻帥を殺し正面に立つ、△□甲乙四人隔に立つて、)

□

「勇ましき日本武尊。」

△

「日本童男ご名のり玉へご、まごごは姫も羞しき女姿。」

甲

「或は此世のものならぬ。」

乙

「奇しき變化にあらざるか。」

尊

「事もかしゃ、さりながら、我嬢君倭姫の命、かゝる事もあらむかご、心づくしの旅立ちに、御暇乞に参られし時涙ながらの物語。」

少女

(一)「綾の御衣を賜はりて、これを我ご思ひ、かしづき玉へこの御仰せ。」

少女

(二)「その移香の被袈、幾夜を露の醜草に。」



少女 (三) 「また或時は満ッ潮 干潮が波のまに〜。」

少女 (四) 「熊襲臬帥に近づけば。」

少女 (一) 「新殿の御祝、里の乙女をかり集めて、豊御酒の壽きあり〜聞く。」

尊 「折こそよけれ、乙女の姿に身を粧ひ、計らずも討平けし熊襲臬帥、正しくこれぞ御姨君倭命の御賜。」

(と東の空を見て愁然とする、)

甲 「かくてこそ瑞穂の國の大八洲。」

乙 「八千代榮ゆる君萬歳の御喜び。」

○ 「神の三種の御寶は。」

□ 「八咫の鏡に八坂瓊の曲玉。」

甲 「其叢雲の劔の物語に、簸の川上の鳥渡や。」

一同 「川上臬帥亡びたり。」

乙 「して其劔の成行は。」

尊 「オ、左様ぢや、素盞鳴尊は八股大蛇にまたがつて。」

(と日本武尊川上臬帥をふまへ。)

乙女一同 「十拳の劔ぬき放ち。」

尊 「熟瓜の如く切り裂けば、流る、血潮唐紅、八股大蛇の八つの尾の中に憂し〜音高し。」

少女合唱 「火花の散るや切ツ先に

まばゆく光る劔あり

玉ちる劔御寶の

都牟刈之太刀は現はれぬ。

天照す大神にさゝげたる

叢雲の劔ぞ目出度けれ〜」

(ト舞ひながら幕)



歌お  
劇伽  
兎  
の  
春



「兎の春」

登場人物

月の神

兎甲、乙、丙、丁

月の神従者兎四匹

の春





1 2 3 4



本舞臺正面空に大なる満月の書割、左右雲の袖幕、空中月夜の景色

合唱

『今年や卯の年兔のやうに

うまい話を耳そばだて、

聞けば嬉しい初便り』

(幕明く)

合唱(兔四正唱ひながら登場)

『今年や卯の年兔のやうに

兔の春



うまい話を耳そばだて、

聞けば嬉しい初日より」

合唱 『伊勢は蓬萊二見が浦に

昇る日の出は眞赤で丸い

かどの御旗もまんまるい

丸いはずだよ治る御代は

敵にかち／＼かち／＼山の

今年や卯年はねる年』

甲 「今年は卯の年我等の當り年、何か面白い耳よりな話があるうか、待てば海路のたこへの通り。」

乙 「月の神様より御祝を賜はるにて、今宵の御酒盛。」

丙 「初春早々御馳走になれるこいふのは難有いこいではないか。」

丁 「下世話にも言ふ通り、終は脱兎の如しぢや、一つ花々敷景氣をつけて、騒がうではないか。」

甲 「ほんに不景氣ぢや／＼と、寄るこさわるこほして斗り居るが、我等のあたり年、一番はねかへさしてやりたいものぢやな。」

乙 「さうだ景氣よくやりませう。」

丙 「それではお屠蘇の仕度に。」

皆々 「かゝるこしよう。」

(ト乙丙屠蘇の仕度をなす。)

丙 「サア／＼お前からお始めよ。」

乙 「イエさう云はずにお前から。」

丙 「マアお前から。」

甲 「エ、面倒な、わしから始めませう。」

丁 「サアわたしが御酌して上げよう。」

甲 「オット／＼散ります／＼(一杯飲む)あゝ旨い／＼春は年のあらたまるこ共に氣もすがす



がするが、かうして一杯いたゞくも、何もなくうき／＼して踊りたくなつてくる、誠に天の美祿はよく言つたものぢやな。」

丙 「其美祿をお前一人で占領せずに早くこつちへ廻して御呉れ。」

甲 「これはごんご忘れて居た。」

乙 「これ、お酒盛に夢中になつて居る中に、邊りが大さう明るうなつた。」

丁 「月の君様が御出ましになる。」

皆々 「時刻であらう。」

(月の神、兎四正をつれて登場)

月の神 獨唱 『赤い眼は涙にうるほふ

可愛いいちらしの我子等よ

今宵卯年の御祝に

はやせ唄へや我子等よ』

甲乙丙丁 合唱 『我大君よ

をさまる雲の大空に

天津みてらす御姿の

静けき今宵美しき』

(間奏)

戊 「月の君の御仰せ、今宵御酒宴の御座興に、何か面白い話をせよとの仰せでございます。」

丙 「サア、誰ぞ面白い身の上話が無いかなう。」

乙 「あれば早く聞きたいものぢやな。」

丁 「それなればお前のやうな、はねつかへりの、いたつらものには屹度あるに違ひない。」

甲 「あれば早く咄して下さらぬか。」

丙 「よし／＼、然しこれは内所事ぢや。」

乙 「エ、又内所事とは。」

丙 「それがサ、實はお話すれば我が身の恥。」

甲 「恥も外聞も關はぬ内輪同志、お前の恥は又我等の恥、他人ごこならぬ誠なるわけぢや



故、早く話して下さらぬか。」

丙 「それならば話すましよう、皆の衆笑はつしやるなよ。」

甲乙丁 「よいとも〜。」

丙 「丁度春の花見時、遠山霞の廣い野原には、奇麗な花が咲亂れて居つた、すみれ、たんぽぽ、れんげ花、蝶々はヒラリ〜ミ舞つて居る、空には小鳥の囀る聲が楽しさうに聞ゆる、うつら〜ミ眠たうなる、よい心持の日であつた。」

甲 「成程な。」

丙 「暖い青い草につままれて、う〜〜〜ミ一眠り。ふ〜ミ眼を開いて見るミ、枕元に一疋の龜の子が居つたのぢや。」

皆々 「はてな。」

丁 「それからさうした。」

丙 「其の龜の子の奴がなう、ナント兎さん、あの山の麓にある赤い鳥居のあたりの櫻は、奇麗なものではないかミ言はれて、籠手をかざせば、咲きも後れず散りも始めず、それは〜」

美しい。一番花見ミ浮かれ出さうかミ、其の龜を誘つたのが一期の失策。」

丙獨唱 『世界の中でお前はど

歩みののろい者はない

どうしてそんなにのろいのか』

甲乙丁 合唱 『何と仰しやる兎さん

そんならお前とかけくらべ

向うの山の麓まで

どちらが先に駆けつくか』

丙獨唱 『なんぼう龜がいそいでも

どうせ晩までかゝるだろ

こゝらで一吋一ねむり

ぐう〜〜〜〜〜』



(間奏)

(ト丙は面白く舞ふ)

丙 「覺めた時には横顔に夕日がかゞやく、これはしまつたミ馳出して行つて見れば、残念ながらおれが負ぢや。」

甲 「油斷大敵ミはよく言つたものぢやな。」

丙 「その通り。これからはミのやうなものでも、中々侮れませぬぞ。」

乙 「それは失策話、何か得意の話を聞きたいものぢやな。」

丙 「さア。誰ぞないかな。」

丁 「ある〜。」

乙 「お前にか。」

丁 「いやあれにある。」(ト甲を指さす)

乙丙丁 「あるなら早く話した〜。」

甲 「それでは話すさししよう、お前方も知つての通り、私の村の麓には、それは〜情深いお

爺さんとお婆さんがあつてナ、誠に涙もろい親切なお方で、いつも〜可愛がつて下さつたものだ、其お爺さんが精を出して作つて居る裏の畑の芋を、いたづら者の狸めが來て盗み出すので、或時こらしめの爲に繩でく、つて置いたのぢや。」

皆々 「成程な。」

甲 「お爺さんのお留守に、お婆さんをだまして繩を解て貰ふミ、恩知らずめが、可愛さうにお婆さんを其繩でしめ殺したのぢや。」

丙 「その婆さんをしめ殺したミ。」

乙 「ハテむごい事をしたものぢやなア。」

甲 「殺した上にお婆さんに化けて、お爺さんが歸られるミ狸汁ぢやさいふてお婆さんのお汁をのましたのぢや。」

乙 「ハテサテ悪い奴ぢやナ。」

甲 「そのやうにお爺さんを欺して置いて、仕舞には椽の下の骨を見ろミ、惡口言うて逃けて行つた。」



丙 「お氣の毒なごちやナ」

甲 「お爺さんは泣いて居る、わしは見るに見かねて腕をたゝいて立つたのぢや。」

甲獨唱 『敵を打つてあげませう』

合唱 『冬枯時の裏山に

薪拾ひと誘ひ出し

背中に柴や枯松葉

火種をつくる火打石

かち〜言ふのは何じやいな

ここは力子〜山なれば

かち〜云ふのは無理はない』

(同奏)

『ぼう〜言ふのは何じやいな

ここはぼう〜山なれば

ぼう〜いふのは無理はない。

ふりむく狸のうしろには

早くものぼる白煙

あつ〜と逃げてゆく』

(同奏)

『やけどの妙薬〜と

兎のばけし薬賣

それを聞きつけ飛んで来た

狸の背中にはりつける

薬にあらで唐辛

アイタ〜と逃げてゆく』



『こんどは瀬戸の裏川に

浮べて見せる船遊び

兎の乗つた木の船と

狸の乗つた土船と

流れにまかせゆくほどに

水の早瀬に土船は

ガラ／＼解けて沈みゆく

狸も共に沈みゆく』

(と舞が終つて)

甲 「これで見事仇を打つて上げたが、私の一生の中、これほど愉快なことはなかつた。」

乙 「それは大手柄ぢや。」

丙 「誠にいさましい話ぢや、ナント外にお話はないものかナ。」

乙 「あるごも〜。」

甲 「あれば話してはさうぢや。」

乙 「されば、おれは又意氣地なくも助けられたお話、渡る世間に鬼はなく、捨る神あれば助ける神様の有難いお話ぢや。」

丙 「夫れは又何ういふ譯ぢや。」

乙 「もこそそれがしは隠岐の國といふ小さい島に生れたもの、さうかして、この日本に渡つて見たいと思ひながらも、ひれもなければ翼もない、海上十里、さうして渡らうかと思案にくれて居るさナ。」

皆々 「なる程ナ。」

乙 「或時一疋の大鰐が濱邊に遊んで居つたから、わるいこゝし、は知りながら、その鰐をウマク誑して背中に乗つて渡つて來たさころが、濱には磯馴松、浦の苫屋の夕煙、誠に美しい



此國の景色に別れかねて、もう歸らぬといふも、鰐めが腹を立て、よう誑しよつたなら、此の寒空に皮をむかれて丸裸、おれの命もこれ限りかき、運を天に委かせて寝て居るも、大きな袋を背中に背負つて通りかゝる大黒様。」

乙獨唱 『大黒様はあはれがり』

(間奏)

甲丙丁 合唱 『きれいな水に身を洗ひ

蒲の穂綿にくるまれど

よくよく教へてやりました』

(間奏)

乙獨唱 『大黒様の言ふ通り

きれいな水に身を洗ひ

蒲の穂綿にくるまれば

甲丙丁 合唱 『兎はもとの白兎』

(間奏)

(面白く舞ふ)

甲 「成程、難有い神の御利益。」

丙 「仇やおろそかに思ふまいぞや。」

乙 「それから以後は此通り、ピン／＼達者でくらされるのぢや。」

甲 「たれかもつみ面白い話をききたいものぢやナ。」

丙 「もうお話がなければ、向ふの兎は聲自慢ぢや、一つ唄ふてきかせぬか。」

丁 「はづかしいナ。」

甲乙丙 「サア唄つた／＼。」(ト手をたたく)

丁獨唱 『雪をまるめて兎をつくり

梅の蕾を眼とすれば

可愛いや涙の色も香も』



『雪を丸めて兎をつくり

しまの小笹を耳にとさせば

うれしやきこゆる内所話も』

甲 「これは面白い皆で唄はうではないか」

皆々合唱 『雪を丸めて兎をつくり

梅の蕾を眼とすれば

可愛や涙の色も香も』

甲 「まことに面白かつたく、ナント皆の衆月の神様へのお慰みにこれから皆んな踊らうではないか。」

乙 「賑かにサア踊るさしよう。」

皆々 「踊らう〜。」

(月の神を圍みて、兎八正のダンスとなる。)

合唱

『今年しや卯の年兎のやうに

うまい話を耳そばだて、

聞けばうれしい初日より』

(間奏)

合唱

『伊勢は蓬菜二見が浦に

のぼる日の出は眞赤で丸い

かどの御旗も眞まるい

丸いはずだよおさまる御代は

敵にかち〜かち〜山の

今年しや卯の年はねる年』

(幕)



悲歌劇「リサール博士」



登場人物

- 一、リサール博士
- 一、老僧ビラール
- 一、ホセヒナ (リサール博士の許嫁の妻)
- 一、テオドラ (リサール博士の母)
- 一、トリニダツド (リサール博士の妹)

場所

サンチャゴ城牢獄の一室

時

千八百九十六年十二月廿九日曉方

「リサール博士」





「マサキハ騎士」



(ヘスイツト寺の寂しい鐘の音、静かなる讃美歌の合唱につれて幕明く。)

(薄暗き電燈の許にある中央のテーブルにて、今しも「臨死の辭」を書終つた比律賓の志士リサール博士は周圍を見廻し、「臨死の辭」を書いた紙片を炊事に使つた酒アルコール精ランプ燈の底に隠して立上りながら)

リサール「久振で心持が快よなつた、雨期の長雨が晴れた時のやうに、長い間黒い雲に閉こざれて居つた月が、雲の間から、美しい光を放つて居るのを見た時のやうに、清さわい爽やかかな、すがすがしい心持になつた、矢張り、神様は自分を憐あはんで居給ふに違ちがない、自分は今、「ゴメス」、「ボ



リオス」「サモラ」のやうに、やがて、『バングバヤン』の草葉の露も消ゆるであらう、然し、然し、『カ、ヤン』の水の盡きざる限り、火炎樹の炎の燃ゆる限り、(間)『ババイヤ』の落るやうに、『アチス』の崩るやうに(冷笑)『スペイン』の暴政は何人にか改めらるゝに違ない、それは只時の問題であらう、我愛する本國！我『ヒリツピン』の同胞は悪魔の手から救はれねばならぬ、自分の生命は、今日の死によつて却つて永久に引伸される、さうだ、我靈魂は不滅である、死は一時の休息である、死！ 死！ 死、何かあらう。」

(靜かに部屋の中を歩みながら獨語しつゝ、其中に、自然に亢奮して來て「臨死の辭」の詩を唱ふ)

リサール  
獨唱

『東海の眞珠に比ふべき』

我愛するヒリツピン群島の同胞よ

我今汝をあとにして逝むとす』

(間奏)

『暗膽たる今朝の明けゆく時』

曉の鐘二十三州に鳴響く時

死は鴻毛よりも軽く我今天に上らむとす』

(間奏)

『輝く朝日の赤きを望まば』

我血を絞りて之に捧げん

うづまく濤の靜きを望まば

我涙を注いで之を覆はん』

(間奏)

『我神靈は永久にして死は一時の休みなり』

カ、ヤンの流れ盡きざる限り

マヨンの煙消ぬざる限り

我靈魂は此國を守らん』



(間奏)

『幸福を享<sup>う</sup>ずして空しく死する人の爲め  
 自由を失うて徒らに煩悶する人の爲め  
 禽獸にひとしき生活に追はるゝ人の爲め  
 薄命<sup>はくめい</sup>をかこつ可憐なる慈母の爲め  
 捕虜の如くに束縛せらるゝ兒童<sup>こども</sup>の爲め  
 罪なくして捕はるゝ志士仁人の爲め』

(間奏)

『我靈魂は此國を守らん  
 我愛するヒリツピンの同胞よ  
 正義をして此國を治めしめよ  
 汝の自由の爲に——』

汝の幸福の爲めに——

我今笑つて天に上り神に訴へん』

(此獨唱の終る少し前、入口の扉をノックしながら)

老僧 「リサール、く〜。」

(こ嘗てリサールの教師であつた老僧ビラール登場)

老僧 「リサール、リサール博士、愛する我が子。」

(リサール、身構へながら不思議さうに老僧を見る)

リサール 「嘗て見知らぬ僧正。」

老僧 「ホーセ、リサールよ、ヘスイット宗の老僧ビラールを見忘れたるか、其方の幼き時、サ

ントトマスにて文讀むこゝを教へたビラール。」

リサール 「オ、我が師ビラール。」(思ひ出す)

老僧 「リサール殿、覺つて居て下さつたナ、これは辱<sup>はたけ</sup>ない。」

リサール 「思ひがけなき師の君ビラール、明日をも待<sup>また</sup>で消<sup>また</sup>ぬんこする、丁度風前の燈火のやうな我



が生命、此世に何の希望もなき身に、何御用あつて参られましたな。」

老僧 「サ、その果敢なき生命じやによつて、せめて御身を、息ある中に救ひたい、妙なる音楽に、不斷の花の香ある、主の君の許に導いて上げたい。」

リサール 「ア、貴僧までも同じ仲間に見ゆる、手を替へ品を替へ、此リサールを苦め玉ふか、生命を奪るにあき足で、息ある中に、我精神まで奪はうとする、(間)無益な業ぢや。」

老僧 「いや、僻言を申し玉ふな、後世もある、天堂もある、主の救の教には……。」

リサール 「申されな、後世も、天堂も誤れる宗旨に何を望みませう、現在、自分等の足元さへも見ぬ方々に。」

老僧 「現在！ さうぢや、其瞬間の現在に、ピラールがお頼み申したい。」

リサール 「現在！ 呪ふべき現在！ 我現在は何黒だ、惨虐だ、虚偽だ、無道だ。」

老僧 「惨虐！ いや、無道！ いや、さうでない、虚偽でない、闇黒でない、光明が輝いて居るではないか、リサール博士、其方には、慈悲深い神の御心が見ぬないのか、今、現在、輝いて居る光明が見ぬないのか。」

リサール 「何？ 光明が輝いてゐる？」

老僧 「現在！ 今、お前は、慈悲深い母に遇ひたくはないのか、テオドラ殿に遇ひたくはないのか。」

リサール 「母上に！」

老僧 「現在！ 今、お前は美しい妹に遇ひたいとは思はぬか、トリニダッドに遇ひたいとは思はぬか。」

リサール 「妹！ トリニダッド！」

老僧 「現在ぢや、その現在！ お前は唯一人の恋人ホセヒナに遇ひたくはないのか、許嫁の恋人に。」

リサール 「恋人！」

老僧 「その恋人ぢや、現在、今。」

リサール 「恋人！ 母上！ 妹！」

老僧 「さうぢや、現在、今、お慈悲深い神の博愛に従つて、お前が、既に犯せる罪惡を懺悔し



て、輝く光明を拜む時は、其瞬間ぢや、戀人にも遇へよう、母上にも遇へよう、妹トリニ  
ダツドにも遇へよう、現在、今直に。」

リサール「現在！ 呪ふべき現在、我に懺悔すべき罪悪があると言ふのか、現在は闇黒だ」  
老僧 「いや、闇黒でない、光明が輝いてゐる。」

リサール「闇黒だ、無道だ。」（此詞を受けて獨唱になる）

リサール  
獨唱 『闇黒だ』

無道だ

虚偽だ

惨虐だ』

老僧獨唱 『闇黒ではない』

無道ではない

お慈悲深き神の御國である』

リサール  
獨唱

『神の御國ではない』

慈悲が何處にある

比律賓の大守は我をあざむいた

此國を汚す僧は我をおどしいれた』

（問 奏）

『ドミニコノ』

オーグスチノ

フランシスカノ

ヘスイータ』

（問 奏）

『眠れるかマヨンの山』

休めるかタアルの頂』



(間奏)

「我は現在を呪ふ」

我は現在を呪ふ」

(リサール毅然として高唱す、「眠れるかマヨンの山」あたりから老僧は後下りし乍ら入口の扉の方に行き静かに扉を開ける、扉の外に、母、妹、戀人の咄聞ゆ)

ホセヒ  
ナ獨唱

「我は現在を呪ふ」

リサール  
獨唱

「我は現在を呪ふ」

ホセヒナ、母、妹合唱

「我は現在を呪ふ」

(リサール不思議さうに感應する)

リサール  
獨唱

「呪ふべき」

此世は闇黒ぢや」

ホセヒ  
ナ獨唱

「悲しや」

此世は闇黒ぢや」

母船唱

「うらめしや」

此世は闇黒ぢや」

妹獨唱

「なさけなや」

此世は闇黒ぢや」

リサール  
獨唱

「此の世は闇ぢや」

闇黒ぢや

我は現在を呪ふ」

ホセヒナ、母、妹合唱

「悲しや」

うらめしや



此世は闇ぢや

闇黒ぢや』

(三人唄ひ乍ら登場、老僧はホセヒナの後について靜かに歩む、)

リサール、ホセヒナ、母、妹、合唱

『悲しや

此世は闇ぢや

闇黒ぢや』

老僧獨唱『戀の闇夜ぢや

慈悲の光ぢや』

ホセヒナ獨唱『慈悲の光とよ』

リサール獨唱『戀の闇とよ』

老僧獨唱『戀の闇夜ぢや

慈悲の光ぢや』

ホセヒナ獨唱『慈悲の光とよ』

リサール獨唱『戀の闇とよ

戀の闇とよ

戀の闇!

戀の闇!

闇!

戀!』(追々に低く幽かに)

(初めてホセヒナに心づく)

リサール「オ、ホセヒナ、ホセヒナミののではないか。」

ホセヒナ「リサールさま。」

(泣きながらリサールの前に倒れる、近づいて抱起しながら母、妹を見て驚く)



リサール「オ、母上、妹。」

母「リサールよ。」

妹「兄様。」

リサール「オ、トリニダッド、夢ではないか、現ではあるまいか。」

老僧「夢ではない、現ではない。」

ホセヒナ「夢！ 美しい夢、いや、夢ではありませぬ。」

リサール「夢ではないと言やるか、ホセヒナ、眞に、夢ではないく。」

(ミホセヒナを勞りながら老僧と母妹を見る、嬉しき色あらはる。)

老僧「夢ではない、神の慈悲ぢや、慈悲の光りぢや、此世は闇ではない、恵み深き神の導きぢや、ホセヒナごの母御様、妹子、デウス様は有難い、明日の朝日の露さきねるリサールを哀み玉ふて、夢のやうな、幻のやうな、美しいく、恵を垂れ玉ふ、リサール博士よ、現在は闇黒ではあるまい、光明が輝いて居る、恩愛深い母御の面にも、美しい妹御の涼しい眼にも、可憐いホセヒナの紅き唇にも。」

老僧「まことに、我等の希望も其處にある、又、ホセヒナの願も叶ふまいふもの。」

リサール「ホセヒナのお願は。」

老僧「我宗門の敵たるメーソンに誓を立てし御身は、現在は愚か未來永久夫婦の盃は叶はぬもの、リサール、其事は能く心得て居らうがな、いぢらしや、ホセヒナ殿には、配所の昔の契を忘れず、ダビタン磯の千引の岩許嫁したる上は、あくまでも其方の妻ぢや堅い決心、苟且にも、夫婦の約束したる上は、今宵死すも、明日永別るも、神に誓を立てたき御希望ぢや、けな氣に申さうか、天晴、今の女子に珍らしい石よりも堅い志ぢや、リサール、ごう思はつしやる。」

リサール「……………」

老僧「母御殿には如何思はれますか。」

母「……………」

老僧「妹御、トリニダッドには、ごう思はれますかな。」

ホセヒナ「リサールさま、お慈悲深き神のお恵に感謝して下さらぬか。」



妹 「……………」(皆々顔を見合せて黙つて居る)

老僧 「ホセヒナの、いぢらしいお願を叶へることは出来ぬと申すのかな。」

ホセヒナ 「リサールさま、妾は死にたい、一緒に、永久に、妾は汝の立派な妻であるから、此國の譽の爲に死んでゆく汝に残されたくない、妾は汝の妻として、未來永劫御傍に居たい。」

リサール 「ホセヒナごの、もう此上は、何にも言うて下さるな、此リサールの良心は——自分の心臓は、これこのやうに波立つて居る。(とホセヒナの腕をこつて自分の胸にあてさせる) 自分は今死んで行くが、此國の同胞の幸福を祈るに同じやうに、お前の幸福も、健康を祈る、よろしい、自分は此國の犠牲だ、又お前の犠牲もならう、さうだ、自分は犠牲者だ、國の爲に、同胞の爲め、戀人の爲め、あらゆるもの、犠牲になつて死なう。」

(と冷かに嘲笑ふやうに老僧を見る)

老僧 「リサール、能く言はれた、如何にもその通り、お前がデウス様に跪座けば、ホセヒナの希望も叶ひ、年老いた母御殿や、美しいトリニダッドの前途も安泰と言ふものぢや、何の氣遣がありません、さうだ、リサール殿、懺悔の文をお書き下さるかな。」

リサール 「懺悔の文?」

老僧 「懺悔の文、デウス様に捧げるべき懺悔の文。」

ホセヒナ 「懺悔の文は。」

老僧 「それがなくては、リサールは破門の人、そなたと結婚の誓は結ばれぬ。」

ホセヒナ 「懺悔の文を書かない時は。」

リサール 「書く、書く、書て進ぜる、肉體は愚か、我が精神までも犠牲にする……………」

老僧 「書く、書くと言ふか、やれ辱ない、懺悔の文さへ捧げたならば、ホセヒナのお望み通り、何時にても、そなたはリサール博士の妻ぢや、神のお許を得た立派な妻ぢや、懺悔の文を書いて仕舞へば、ヘスイタ宗の歸參も許されて、我等同様デウス様の懐中見、神前の誓の儀式、其用意も略儀ながら整うてある、リサール、屹度書いて下さるな」

リサール 「書く、書きます……………」

老僧 「書く、書く、辱ない、そら、ここに下書がある、この通り書て貰ひたい。」  
(と老僧懐中より懺悔の文を取出して)



老僧 「この通り書て下さい。」

(リサール其心の呵責に苦悶しつゝ、暫瞑目して居る、老僧懺悔文を差出して居るけれど受取らうとしない)

老僧 「読みませうか。」

リサール 「……………」 (黙つてうなづく)

老僧 「お書き下さるか、読みますぞ。」

リサール 「書く!」

(と言ひながら机の傍に坐つて紙を展べペンを持つ、ホセヒナ、母、妹、皆々神に祈る心持、老僧は静かに懺悔文を読み出す)

老僧 「余はカトリック信者なり、余はカトリック信者として生き又死せんことを希ふ。」

リサール 「ア、待つた、暫く待つてくれ。」

老僧 「何と言はるゝか」

リサール 「此期に及んで、未練らしく、卑怯なことは決して申さぬ、ただ、(周囲を見廻はし)

オ、曉の風の音がする、はや、ほのく、小窓は白んで来た、バングバヤンの霧の晴れきらぬ中に、自分は此處を去らねばならぬ、僧正ピラール、たつた一言、妹と話したいとがある。」

妹 「兄様。」

老僧 「遠慮には及ばぬ、サアお話しなさい。」

妹 「兄様。」

母 「トリニダッド、すつと傍へ行つて能くお聴なさい。」

リサール 「トリニダッド、お前にはいかい苦勞をかけて、誠にすまなかつた、永らくお母様に御心配ばかりかけて居つた不幸な兒は、更に不幸を重ねて、此曉には先立て逝かねばならぬ、自分には、何うしても直接に、お母様に謝る氣勇がない、お前からも能くお謝して貰ひ度い、さうして、此末長く、不幸な兄に代つて孝行を盡して呉れ、リサール、マルカド家の名譽の爲に、自分は刑場の露を消しても、其犠牲を空くしたくない。」

妹 「能く判りました、妾も母様も(泣聲)いぢらしいホセヒナも、兄様の名譽ある平和を、深く心の底から、喜んで居ります。」



リサール「辱ない、これで何にも、心残りはない、ア、さうであつた、トリニダッド、お前に何か記念の品を與へたい、いやお前ばかりではない、母上にも、ホセヒナにも。」

(四邊を見廻し、それから「臨死の辭」の詩を隠した洋燈と、時計と、ペンとを机の上に置いて)

リサール「母上には、此獄中に、淋しい長い月日を絶えず、休息す、夜から朝へ、朝から夕へ、慰めて呉れた時計を差上げた、ホセヒナには、今此リサールが死に臨んで、永久不滅の我精神までも犠牲にして、懺悔の文を書ねばならぬ、この筆、この筆を、かう擱んで書ねばならぬ時に、自分の精神は何のやうであつたかを忘れずに、よろしいか、覺て居つて貰ひ度い、このペンはお前の爲に残して置く(間)それから、妹、お前には、此兄が此獄中の生活に、冷い汁やミルクを温めたこの洋燈を記念として上る、此品は自分にては愛着に堪へぬ一の記念品であつて、先年自分が佛蘭西に留學した時、國の爲め同胞の爲には、自分を捨て、自由の爲に戦つた、タベラ殿の奥様から頂戴したものぢや、我精神の、いや、其精神は今尙籠つて居る、妹、判つたか、鳥の方に死なんぞ其啼聲や、自から多情多恨の詩を作さか……よろしいか。」

(と目顔で「臨死の辭」の詩が洋燈のアルコール入れの中に隠してあることを知らせる)

妹 「よく、よく判りました。」

リサール「判つたか、いや、それにて自分には、思ひ残すことは何にもない、この洋燈は妹への記念。」

(と言ひながら洋燈を片寄せて)

リサール「僧正の、お聞きしい内輪話、サ、懺悔の文、お読み下さい。」(と紙を展へ筆を取る)

老僧 「けなけな御決心、實に感心いたしました(間)それでは、読みますぞ。」

「余はカトリック信者なり、余はカトリック信者として生き亦死せんことを希ふ。」

余は従來、文書を行爲により、教會に反對したることを、衷心より悔恨す。

余は教會の敵たるメーソン結社を脱退す。

余の屬する教區の僧正は此、懺悔文を公にせらるべし、余は余の著作及行爲により、自他を傷けたる罪惡を出來得る限り輕減せんを欲し、此告白をなす。

世人願くば、余の流したる害毒に對し余を宥恕せられんことを。」

(老僧が此懺悔の文を讀み初める、と殆んど無意識にリサールは筆記する、其中に氣拔した様



に失神して筆を休めて居る、三人は神に祈る様に伏向て居る、老僧は何にも知らずに読み終つて初めてリサールの様子に心付く、小窓からは暁の色はのくく白む

老僧 「リサール殿、さうなされました、お書きなされたか。」

(と近づいて見て)

老僧 「ア、まだ書きませぬナ。」

(三人は面を上げて、氣遣ひ乍ら見て居る、リサールは筆を持つたまま、明けゆく小窓を茫然と見て居る)

老僧 「サ、早く、お書き下さい、暁の色はあざやかに晴て来る、時は近づく、早く、早く、お書き下さい。」

リサール 「書きます、其文をお貸し下さい、書きます、さうしても、書かねばならぬ、書かねばならぬ。」

(老僧は無言にて其文を渡す、リサール受取つて机の上に廣げて、チツと見詰る)

リサール 「書きませう、書く、書きませう。」

(小聲で言ひながら再び筆を取上げて、苦悶しながら書き初める、老僧は靜に、祈禱を初める)

老僧獨唱 『嗚呼、天主

廣大なる御哀憐を以て

我を憐み給へ

最も温和なる耶蘇

御苦難の功德に因りて

我を善人の中に加へ給へ

哀憐の母なる聖マリア我を護り給へ

天堂の諸聖天

我が爲に祈りて我を助け給へ』

(間奏)

母、妹、妻  
合唱 『主憐れめよ』



僧正獨唱 『主憐れめよ』

母、妹、妻 合唱 『彼の爲に祈り給へ』

僧正獨唱 『聖マリア、諸の天使及大天使

聖アベル、義者の群衆

聖アブラハム、洗者聖ヨハネ

聖ヨセフ、聖なる諸の大祖及豫言者

聖ペトロ、聖ホーロ、聖アンデレヤ

聖ヨハネ

聖なる諸の使徒及福音史家

主の聖なる諸の弟子』

(静かなる祈禱的獨唱の一句毎に母妹達の『彼の爲に祈り給へ。』の二部の合唱の間にリ

サールは懺悔文を書く『アーメン、アーメン。』の合唱あり悲壯なる中に、幕)

歌 劇  
雛

ま  
つ  
り



登場人物

令嬢 富貴子

友達 澄子

同 廣子

同 月子

五人囃 笛の役

太鼓の役

鼓の役

大鼓の役

室の役

内 裡 離

場所

令嬢富貴子離祭の間

「離祭」





1  
1



本舞臺正面金襴赤の毛氈をかけたる雜段の飾付、内裡雜一對、五人囃、右近の橋左近の櫻等、  
いろ／＼の供物の前にて令懷富貴子、及びお友達澄子、廣子、月子の四人雜談

合唱

『桃の節句の御祝は

丸いあられに菱の餅

五色のいろに形とつて

五人囃の面白さ』

(賑かなる前曲にて幕明く)

舞まっり



富貴子 「よく入らつしつて下さいました、さうぞ今日は御ゆつくりお遊び下さい。」

澄子 「ありがたう。」

富貴子 「それに今日はお父さんもお母さんもお留守で妾一人で淋しいから、ほんまに御ゆつくり遊んで居て下さいな。」

廣子 「遊ばして頂きますわ、澄子さん夕方まで居りませうね、いゝでせう。」

澄子 「夕方まで！ 妾夜になつても關はないのよ。」

月子 「夜まで！ 大賛成。」

富貴子 「嬉しいわ、それでは皆さんで何か面白い事をして遊ぼうではありませんか。」

澄子 「富貴子さん貴女のお宅では毎年かうやつて雛祭を遊ばしますけれど、全體雛祭つて、さういふ譯で始まつたのでせう。」

富貴子 「六ヶ敷い事は知りませんけど、三月の御節句は雛祭、お雛様は女子の弄玩物だから、それでかうやつて女同志遊ぶ事になつたのでせう。」

月子 「要領を得ない説明だわ。」

廣子 「そんな事はさうでもよいのよ、私共は現代與へられた権利即ち我々女の爲に行はれて居る、一年に一度のこの雛祭を、さうしたならば面白く暮せるかといふ方法を、少しも早く實行するのが賢いかと思ひますわ、ねね、さうでせう、澄子さん賛成なさいましたな。」

澄子 「賛成。」

月子 「妾も賛成よ。」

富貴子 「妾だつて賛成だわ、ではかうませう、兎に角お雛様の御馳走をいたゞいて、お腹を拵らへてそれから遊びませう。」

澄子 「では遠慮なく御馳走になりませうネ」

富貴子 獨唱 『兎角戦と云ふものは

腹が減つては一大事

幸ひこゝに花より團子』

月子獨唱 『三國一の

富士の白雪朝日に解る



とけて流るゝお白酒』

澄子獨唱 『三保の松原、田子の浦』

よせては返す白波に

金と銀との本蒔繪

サテモ見事なお重箱』

廣子獨唱 『あけてみよしの櫻餅』

月子獨唱 『女同士の睦まじく互にお手々を握り壽し』

富貴子獨唱 『赤や、白や、數へきれない玉あられ』

廣子獨唱 『赤いは平氏』

月子獨唱 『白いは源氏』

富貴子獨唱 『盃きや眞赤』

澄子獨唱 『白酒きや眞白』

合唱 『サア〜みんなで遊びませう』

(こ唱ひ乍ら雛の供物を取下し皆々舞臺程よき所へ坐る)

富貴子 「サア皆さん御自由にさうぞ召上つて下さいまし。」

澄子 「月子さん貴女お先に召上れな。」

月子 「澄子さんはお壽もじがお好きだから貴女お先に召上れな。」

澄子 「廣子さんは先達て箕面に遠足した時に、お團子をあんなに召上つたんですもの、廣子さんお上んなさいよ。」

廣子 「アラいやよ、妾たつた五本しきや食べなかつたわ。」

富貴子 「オホ、そんなに皆さんが御遠慮なさるんでしたら、妾が御毒見を致しますわ。」

(ト櫻飴を取る)

廣子 「では妾はこれを御毒見。」

(ト團子を取る)

澄子 「私も頂きますわ。」



月子 「妾もよ。」

(此の間五人囃の笛役一寸伸上つて見て、隣へ知らせる五人共に羨ましさうにする。廣子が振向きかける。五人囃子眞面目になる、可笑しき素振、此仕草輕妙なるオーケストラに合はす)

富貴子 「廣子さん、貴女白酒をお飲みなさいな。」

廣子 「白酒！ 大好き妾澤山頂いても關はないの。」

富貴子 「さうぞ澤山に召上つて下さいな。」(ト云ひ乍らお酌をする)

廣子 「月子さん貴女もお好きでせう。」(ト月子に盃を渡す)

月子 「妾少し頂くとお顔が赤くなるんですもの。」(ト廣子がお酌をする)

廣子 「今日は先生が居らつしやらないんですから關やしないのよ。」(月子飲んで澄子に渡す)

澄子 「少しついで下さいな。」

(澄子飲んで月子に渡す澄子お酌をする、此の間五人囃皆々輕き音樂に合せ面白き表情)

月子 「もう酔つたわ。」

澄子 「直にお顔がほかくして來るのよ。」

富貴子 「妾何んだか目が廻るやうで可笑しいわ。」

廣子 「ほんたうに皆さんの好いお顔のお色だこも、富貴子さんは桃の色、月子さんは同じ桃ながら緋桃色、澄子さんはほんのりさくら色、いづれで見ても色ざろい、何んもなく淨き立つ春の景色のやうで御座いますわ、サア澄子サン、一つ唄つて聞かせて下さいな。」

富貴子 「春景色ミ云へば澄子さん、御自慢の色よい聲で「春の色」を聞かせて下さいまし。」

月子 「澄子さんお唄ひなさいよ。」

廣子 「さうして歌がすんだらお庭へ出て鬼ごつ子でもして遊びませうね。」

月子 「賛成。」

廣子 「だから澄子さん早くお唄ひなさいよ。」

澄子 「それでは唄ひますから皆さんも一緒に唄つて下さいな。」

澄子獨唱 『ほのぼの白いは夜明の色よ

山は紫あけぼの色よ

水はコバルト流れの色よ



空に風なくみどりの色よ

花の梢は櫻の色よ

野には菜の花黄金の色よ

暮の鐘つきやたそがれ色よ

月が上れば白銀色よ』

(此の獨唱の間合奏につれて五人囃、腰をかけたるまゝ面白き身振のダンス模様)

(間奏)

富貴子 「大層面白かつたわ、澄子さんは不相變お上手ネ。」

廣子 「私達も唄ひたいわ、一緒に唄はうではありませんか。」

富貴子 「みんなで一緒に唄ひませうよ。」

月子 「さうませう。」

澄子 「さうしてお庭へ出て遊びませう。」

(ト皆々立上る)

合唱

『ほのくく白いは夜明の色よ

山は紫あけぼの色よ

水はコバルト流れの色よ

空に風なくみどりの色よ

花の梢は櫻の色よ

野には菜の花黄金の色よ

暮の鐘つきやたそがれ色よ

月が上れば白銀色よ』

(踊りながら左手へ這入る。五人囃の笛役少しづゝ立上りながら見送る、太鼓役、つづみ役、まれをして見送る。)

つづみ役「ナント笛役、お嬢さん方のお情で、あれあのやうに御馳走が残つて居る。一年に一度のお



祭ぢやきて只だお互に箱から出るばかりが能ではあるまい、内裡様へのお供へものは、かく云ふ我々五人囃子もあやかるのが道理ぢやわい。」

笛役 「如何様つゞみ殿の言はるゝ通り、年が年中、箱の中で樟腦のほひに惱せられて居る我共、赤の毛氈にかう坐つて、笛や太鼓を鹿爪らしく一日窮屈な思ひをするのは、餘り智慧者こは申されまい。」

太鼓役 「まここにさうぢや、又明日は紙につゝまれ綿でしめられ、この道箱の中で暮さねばならぬ運命。」

太鼓役 「よい所へ御氣がつかれた、それでは我々も花々しゆ。」

つゞみ役 「一同氣保養に浮れ出さうではないか。」

一同 「それがよい〜〜。」

(ト皆々舞段より下りる)

鼓役 「おいし相な櫻餅されお毒見こしてわしが一番真先に。」

太鼓役 「イヤそれはならぬ、五人囃の随一人、陽の音締の太鼓役、拙者をおいてお先にこは」

笛役 「これは又面白い、つゞみ太鼓の御兩人、五人ならんで裏表打つや四拍子、八拍子、四去

八聲の其中でも、かく云ふ笛のそれがしは我が日の本に生れしもの。」

つゞみ役 「ハテ珍らしい身の上自慢。」

太鼓役 「唐からもろこしを引合に、それが又、何になりませうぞい。」

笛役 「イヤ申されまい、そも〜舞樂の器にて我が日の本の笛こいッば、天の香具山の竹をこつて、風穴を彫み和氣を通するに初まるこか、されば、かく云ふ笛のそれがしが先づ第一に頂戴すべきもの。」

大つゞみ役 「愚にもつかぬ自慢話、昔より下世話にも云ふ通り、云ひ出し目から、三人目、丁度拙者が當り役。」

笛役 「それはならぬ此場のゆきさつ、誰れ彼れこ云はうより、リヤン、ケン、ホイできめるが上策。」

鼓役 「そんならこで。」

皆々 「リヤン、ケン、ホイ。」



(此時内裡様顔見合せて)

内裡雛 「暫く待った。」

笛役 「オ、内裡様のお聲が、り。」

鼓役 「暫く待て。」

皆々 「仰せられたのは。」

(ト皆々うしろを振向く)

内裡雛 合唱 『一イニウ三イ四ウ五人囃の面白や

はやせ〜囃の中で一子よいのに桃の酒』

合唱 『桃の酒』

笛役 「内裡様の仰せ、それではこれから皆々にて初めるこいたさう。」

太鼓役 「心得た。」

つづみ役 「心得申した。」

笛彼 「それでは私から初めませう、花の散る夜のおほろ月、笛にゆかりの牛若丸、一つ踊りま

せうかい。」

太鼓役 「幸ひこゝにお嬢さんの忘れていつたペールがある。」

笛役 「夫をお貸して下さい、速席ながら牛若丸のかつきぢや。」

(ト舞ふ)

(一)

合唱 『くらまを出て牛若は

女姿の美しく

おぼろ月夜をたゞ一人

笛ふきながら浮れゆく』

(間奏)

(二)

『京の五條の橋の上

大の男の辨慶は

舞まつり



長い薙刀ふりあげて  
牛若めがけて切りかゝる』

(間奏)

(三)

『牛若丸は飛びのいて  
持った扇を投げつけて  
来い〜〜と欄干の  
上へあがつて手を叩く』

(間奏)

(四)

『前やうしろや右左  
こゝと思へば又あちら

燕のやうな早業に

鬼の辨慶あやまつた』

(間奏)

笛役 「太鼓役今度はお前の番ぢや。」

太鼓役 「牛若丸は面白かつた、それではわしも狩場の太鼓にあやかつて、曾我兄弟の物語、お前はさしづめ弟時致、合點か。」

笙役 「心得た。」

(笙の役出づ)

(一)

合唱 『富士の狩場の夜はふけて  
森や林にこだませし  
太鼓の音もしづまりぬ  
あやめもわかぬ五月闇』



(二)

十郎獨唱 『來れ時致今宵こそ』

十八年のうらみをば』

五郎獨唱 『いでや兄上今宵こそ』

たゞ一撃に敵をば』

(三)

合唱 『共に松明ふりかざし』

目ざす屋形にうち入れば』

かたき工藤は酔ひ臥して』

前後も知らぬ高いびき』

(四)

合唱 『起きよ祐經父の仇』

十郎、五郎見參と

枕を蹴つておどろかし

起きんとするをはたと斬る』

(五)

合唱 『仇は報いぬ今はとて』

「出合へ〜」と呼ばれば

折しも小雨降りいで、

空には名のるほとゝぎす』

笛役 「これは面白い振事、こんごはつゞみ役。」

つゞみ役 「それでは拙者もつゞみにあやかり、「靜御前」を踊りませう。」

太鼓役 「いづれも源氏のゆかりのものばかりだな。」

(一)

合唱 『しづの小田巻くりかへし』



静御前は義經に

別れて迷ふ吉野山

もの狂はしき花の影』

(二)

『君が記念の小鼓を

肌身離さず守りして

遇ひし其の夜の睦言を

きかまほしげに打つ時は』

(三)

『夢かうつゝか、まぼろしか (間奏)

鼓に宿る忠信は

君ならなくに移香の

小袖の蔭や右左』

(四)

『峯の櫻の大和川

水の流と小鼓の

音に嵐の花吹雪

静御前のいぢらしき』

笛役 「これは又一段面白い、かうなつては誰が先に云ふは無理ぢや、仲好う皆なで唄ふこ

致さう。」

太鼓役 「心得申した。」

皆々 「それがよからう。」

合唱 『桃の節句の御祝は

丸いあられに、菱の餅



五色のいろに形どつて

五人囃の亂拍子

打つや太鼓のトン／＼／＼

笛はヒリ／＼、トツビツビ

つゞみはボン／＼タツボン／＼

テレツクテン／＼トツテンテン

ヒリリヤ／＼ヒリトロリ

ボンと打込む大つゞみ

重ね拍子に、わり拍子

五人囃の面白き』

(五人囃の踊の騒に娘四人そつと出て来て、ヒソ／＼私語す、内裡様も坐り乍ら浮れ心地、笛  
役不圖娘の入り来れるを見て驚き他の囃子に知らせあわたゞしくかけ上つて真面目に難段に

坐る内裡様も真面目になる)

廣子

「マア御覽なさいな、大風のおまごの様に真面目くさつた、あの顔付き、笛もつゞみも、太鼓も、あの鹿爪らしい構へ方。」

月子

「にくらしい真面目顔、富貴子さんかうしませう。」

(ト内密で耳うちす、それからそれと内密話)

皆々

「みんなで一緒に初めませうネ。」

(ト娘四人、二人づゝ兩側に唄ひ出す)

合唱

『桃の節句の御祝は

丸いあられに、菱の餅

五色のいろに形どつて

五人囃の亂拍子

打つや太鼓のトン／＼／＼

笛はヒリ／＼、トツビツビ



つゞみはボンボン、タツボンボン  
テレツクテンテン、トツテンテン  
ヒリリヤ〜、ヒリトロリ  
ボンと打込む大つゞみ  
重ね拍子やわり拍子  
五人囃の面白き』

(此の歌を二度繰返して唄ふ、初めの合唱が始まるに五人囃子オーケストラに浮れ初め、合唱の末近き頃迄に皆々踊り乍ら降りてくる、二度目の合唱には五人囃の踊りの中に幕)

歌  
劇  
竹  
取  
物  
語



登場人物

竹取の翁  
なよ竹のかぐや姫  
石作の皇子  
倉持の皇子  
右大臣阿部の御主人  
大納言大伴の御行  
中納言磯上の麿  
中將高野大國  
玉の枝細工二人  
侍女 數 各  
中將高野大國の家來數十名

場所

竹取の翁の館

合唱

『實けに美しき花の顔

正面に富士の遠山、右手、竹取の翁の館

すがたかたちはなよ竹の

輝く月のかぐや姫

五人の皇子みこの色好む

霜月しもつきしはす降る氷

水無月みなづきはてる宵闇の

竹取物語



あはれや忍ぶ戀衣

姫は此世を振り捨て、

天の羽衣軽々と

月の宮古は雲かくる

仰げば高き富士の山

文焼く煙立のぼる

竹取る翁物語

竹取る翁物語

(前曲にて幕明く)

翁

「月日の過は早いものぢや、彼是二十年、思出せば夢のやうぢや、竹細工の小商賣、あの裏の竹箴に一本光る青竹、怪しゆ思つて切て見れば、ヤレ、不思議な玉のやうな、神

(竹取翁階を降りながら)

神しい三寸ばかりの女の兒、有難や、神様からの授り兒、手塩にかけて育て来た甲斐があつて成育うなればなる程、美しい花のやうな御姿、三室戸の秋田殿におたのみ申して、お名前をば、かぐや姫とおつけ申した。それから此方、商賣は繁昌する、姫は美しい成人する、年寄つた我身には此上、慾も望も御座らぬ、早うよい婚がねを得て、可愛らしい初孫を見たいものぢや、そして姫の喜ぶお顔を見たいものぢや、さう、婚君と言へば五人の若殿達、姫から註文を受けた無理難題、それを引受て歸られたが、丁度三年越、今日明日と迫つて来たけれ、何人が一番先に持つて来よう、待遠しい話ではあるわい。」

翁獨唱

「先づ初は石作の皇子と記憶たる」

姫獨唱

「唐天竺に名も高き佛の前の石の鉢」

翁獨唱

「第二番目は倉持の皇子」

姫獨唱

「蓬萊山にありとさく

根は白銀壺は黄金



枝に白玉の實のりたるその一枝と申したり」

翁獨唱 「大納言大伴の御行は」

姫獨唱 「龍の首に光る五色の玉」

翁獨唱 「中納言磯上の麻呂は」

姫獨唱 「燕の生んだ子安貝」

翁獨唱 「右大臣阿部の御主人は」

姫獨唱 「見ぬもろこしにありと聞く

火鼠の毛皮ぞ珍らしき」

翁 「その五人の若殿達、今日明日に迫つた三年目、目的を遂げて誰が一番先に歸つて来るこゝであらう。」

姫 「いづれも浮きたる男子の戯れ事、眞面目に待つ方が物笑ひになりませう。」

翁 「笑はれるのも珍らしや、待遠しい事であるわい。」

(石作の皇子唄ひながら登場)

石作皇子獨唱 「笑へ〜」

笑ふ門には福の神

姫は手前の物堅き石の上にも三年阪〜二本棒」

石作 「イヤこれは物笑ひであつた、翁や〜、姫は息災で御座らうの、石作の皇子御註文の石の鉢、見事、持参いたして御座る。」

翁 「石作の皇子殿よう参られた、待遠しい事であつたわい、して天竺の御釋迦様の御前にあるこいふ石の鉢は、持つて参られたか。」

石作 「なか〜、物珍らしい天下の御寶じや、翁よ、かぐや姫に御異議はなからうな。」

翁 「念には及ぶまい、ドレお見せなされ。」

石作 「そら、御覽じろ、錦の袋に入れてある大事な御寶ぢや。」

(翁、取上げて見る、石作皇子面白き腰付にて眺め居る)

翁 「姫、御覽じろ」



(姫、錦の袋より丁重に取出して見る中から文出づ、其文を姫が取上げると同時に)

石作獨唱 『海山の道に心を盡しては

みいしの鉢の涙ながれき』

姫 「佛の前の釋迦の御鉢には不斷の光明ありき聞及ぶ、然るに此石の鉢には螢の光だにも無きは。」

(と言ひながら鉢を投げて見るに四ツに割れる、石作の皇子驚ろく、面白きことなし)

姫獨唱 『置露の光をだにも宿さまし

小倉の山に何もとめけん』

石作獨唱 『まことは大和の國十市の郡

ある古寺の片庇

びんつる様の前に在つた

黒い〜石の鉢』

石作 「イヤ、顯れたが最後ぢや、かぐや姫この通り、ゆるしてたも〜。」

翁 「ハテ。後世のわるい佛の罰が當るぞよ。」

石作 「ばちは太鼓にあたりませう。」

合唱 『ばちは太鼓にあたるどか

あいた〜あいたちこ

遇たい見たい

それも仇なれ

戀の重荷の石作

うんどことつこいしようどやすみける』

(石作の皇子の面白い振事にて、上手に休む)

倉持皇子獨唱

『蓬萊山の玉の枝

蓬萊山の玉の枝



幹は黄金、根は白銀

枝に輝く白玉の

實のなる木をば見せたいな』

(倉持の皇子範入の玉の枝を荷擔て登場)

倉持 「いそいで参つた、翁よ〜。」

翁 「オ。」

倉持 「倉持の皇子が、御望みの通りの御土産を持つて参つた、姫よ〜、そら驚くまいぞ〜」  
翁 「なか〜。」

倉持 「そら、驚くまいぞ〜、翁よ見られ、姫よ見られ、これこそ正しく蓬萊山の玉の枝、ミツくりミ開けて御覽じろ。」

(翁、箱のふたを開けるミ玉の光か〜やく)

翁 「これは又一段ミ見事なる玉の枝。」

(翁、玉の枝を姫に渡す)

姫 「美しき玉の枝。」

倉持 「美しき玉の枝、〜、お賞にあづかる上は、翁よ、御約束通り、よからうの。」

翁 「御念には及ぶまい、見れば皇子にはまだ汐風にぬれた旅衣、つくらはぬ其亂れ髪。」

倉持 「如何にも、昨日の夕方、難波津に着たばかり、着替る暇もなう、取急で参つたので御座る。」

翁 「昨日の夕方ミな、それは又何處から戻られた。」

倉持 「ハテ、合點のわるい、蓬萊の島から其玉の枝を取つて戻らいで、何處から戻りませう。」

翁 「蓬萊の島、これは珍らしい話ぢや、姫や、御聞きやつたか蓬萊山の初便り、倉持の皇子殿其道行話、一ツ聞せて下さらぬか。」

倉持 「願うても無いこと、心得申した。」

(是より倉持皇子の軽い面白い舞になる)

倉持 「蓬萊山に行かばやミ、二年前の着更衣十日、難波の濱を船出して、波は白雲、水や空。」

倉持獨唱 『東に上る朝日影

西にうすづく夕日影



月は照せど山は無く  
輝く星の空はれて  
明れば同じ海の上』

(間奏)

合唱

『たま〜見ゆる雲の峰  
風にくだけて消ゆる時  
四邊はくらくものすこく  
逆巻く浪の小夜嵐』

(間奏)

『雨はサラ〜  
霰はた〜く  
雪はチラ〜

迷はせる』

(間奏)

『八重の汐路の久方に  
朝と夕と指折れば  
沖津白波かもめと共に  
海に漂ふ五百日』

(間奏)

倉持

『五百日目の辰の時、大海原の真中に、かすかに見ゆる山の頂、心を取直して勇んで漕ゆ  
く時の嬉しさ。』

合唱

『それ漕げ、ヤレ漕げ蓬萊山が見ゆる  
それ漕げ、ヤレ漕げ蓬萊山が見ゆる  
嬉し涙がポータポタ、ポータポタ



權の雫がポータバタ、ポータバタ』

(間奏)

(此時玉細工人二人「一」「二」人は交はさみに文をさして持つたまゝ出て來り倉持の皇子を見  
て)

(一) 「ヤア、あたく。」

(二) 「こゝに居たく。」

倉持 「あゝ、何も言ふまい、くゝ、云ふまいぞ。」

(一) 「いやくゝ云はいではなりません。」

(二) 「なりませんわい。」

倉持 「あゝ、解つら、云ふな、云ふな。」

(と言ひなが踊つて居るに二人もつり込れて一緒にからんで踊る)

合唱 『それ漕げ、ヤレ漕げ

廻れば七里

七里七浦七不思議』

(間奏)

合唱

『雪が降るの江花が咲き

雨は降れども地は濡れず

月が出るのに鳥唄ひ

風は吹いても葉が散らず

金銀珊瑚の森茂く

タイマイ瑠璃の水流れ

輝く玉の橋の上

萬年新造のたをやめが

にっこり笑つて下された

花の一本玉の枝』



(間奏)

『貰つて歸りは千里も一里だ』

『追い手に帆かけてくくくく』』

倉持

「ハ、、斯くの次第で御座る。」

(と舞終つて初めて玉細工人二人に氣がつく)

倉持

「ヤ、御前方は。」

(一)

「あなた様は倉持の皇子様。」

(二)

「その花の一本玉の枝、返して貰ひませうかい。」

倉持

「こゝは場所がわるい、判つてゐるく。」

(二)

「いや少しも判りませぬ。」

倉持

「申されなく、判つて居るに申すに。」

(二)

「申さうぞく、判つて居らぬに申すに。」

倉持

「いや申されなく。」

(二)

「いや申さうぞく。」

(一)

「はい、竹取の翁殿、その花の一本玉の枝、やつがれにお返しを願ひます。」

翁

「何を言はるゝのぢや。」

(二)

「ハイ、眞實まことは此皇子様の御頼みによつて。」

(一)

「精進潔齋、茶断ち鹽断ち、二年餘りもかゝつて、こしらへたもの。」

(二)

「それに今だにお鳥目も下さらぬ、御無體のなされ方。」

(二)

「ごうぞ、御返しを御願申し升。」

倉持

「イヤ、面目のない次第。」

(と言ひながらこそく、と石持の皇子の傍に坐る)

翁

「それは又御氣の毒な話、姫きかれましたか。」

姫獨唱

『まことかど聞いて見つれば言の葉を』

かざれる玉の枝にぞありける』

翁

「サア、御返し申す。」



(翁箱に入れて渡す)

(二) 「や、有がたやく。」

(二) 「すんでのこゝに倉持の皇子にだまさるゝ所であつた。」

(一) 「これから先は倉持イヤ盲目持で。」

(二) 「サア、歸りませう。」

(二人に行違ひ盲目の男、大納言大伴の御行登場)

(一) 「サア、盲目持ち、御前の番だぞ。」

(二) 「これはしまつた。」

(こ箱を受取る)

大納言 「何ぢや。」

(一) 「いや、此方の話だ。」

(一) 「二」退場)

翁 「ハテ見なれぬ男。」

大納言 「見なれぬ男とは情ない、私ぢやく、竹取の翁よ、なよ竹のかぐや姫よ、大納言大伴の

御行を忘れ玉ふきは、ハテサテ情ないこゝであるわい。」

翁 「大伴の御行ごのみな、如何様(ちつと見て)變り果たお姿、これは又きつい惱み方。」

大納言 「これ言ふのも姫に戀した天罰で御座らう。」

翁 「何ぞ御言やる。」

大納言 「龍の首にある五色の玉を取つて参れよ、姫の御望、家來共に申付た所、褒美の金次第首

尾よう取つて参るよ受合うたによつて、申付けたのが磨の過失(あやまり)。」

翁 「それは又さういふ理由」

大納言 「新館は出来上る、姫を御迎する御仕度は整うたけれよ、かんじん要の五色の玉を取りに

やつた家來共は一向に歸つて見ぬによつて、自から南の海に出かけて行く、漁師共に聞

て見れば、及びも依らぬ無益(むじやく)の事、然し、男の面目にかけても、弓矢八幡、龍を退治し

て、其首にあるさういふ五色の玉を取らねば此大納言の男がたゝぬ。」

翁 「如何様、勇しき話。」







翁 「これはく。」

姫 「あなたは中納言様。」

中納言 「姫、燕の巢の子安貝、持参したと思やるか。」

姫 「……………」 黙って笑ふ

翁 「燕の生んだ子安貝、早う見たいものぢや。」

中納言 「いかなこ。」

翁 「有た言はるゝか。」

中納言 「左れば、御臺所の片庇、大な燕の巢があるによつて、其中に生つけた頃を見計らひ其を取つたならばさうぢや、三人に教へられたゆゑ、竹の梯子によぢ上つて、寢息をうかゞひそつミ手を伸して巢の中へ手を入れて見るこ。」

大納言 「子安貝は有りましたかな。」

中納言 「生暖い、柔いものがグシャリミ手についたので、やれ嬉しやミ、よくく見れば子安貝と思ひの外、それは燕の糞であつたので、驚いた拍子に其竹の梯子からスツテンコロリミ

ころけ落ち、これこの通り足腰を痛めて、體の節々が痛うて、ならぬわい、これ言ふのも、竹取の翁よ、御前の商ふ竹の梯子に蟲づいて居るのが、わるいゆゑぢや。」

翁 「これは無體な言ひがゝり。」

大納言 「いや竹には節もあれば蟲くひもあらう、節が自慢の磯上の麻呂、一ツ聞たいナく。」

皆々 「それがよからう。」

中納言 「それでは一つ唱ふませうか。」

中納言 獨唱 『竹に節あり枝には小ぶし

唄は伊豫ぶし薩摩節

忍路高島松前節と

菖蒲咲くかや潮來節

まゝよ三度笠よしこの節と

しんきしの竹有馬節

箱根八里の追分節と



めでた〜の木遣節』

翁 「成程これは面白い。」

大納言 「一ツ皆んなで唄はうではないか。」

倉持 「それがよからう、それでは一ツ麿が舞はうか。」

合唱 『竹に節あり技には小ぶし

唄は伊豫節薩摩ぶし

忍路高島松前節と

菖蒲咲くかや潮來節

まゝよ三度笠よしこの節と

しんきしの竹有馬節

箱根八里の追分節と

めでた〜の木遣ぶし』

(間奏)

(舞がすむと右大臣、阿部の御主人唄ひながら登場)

右大臣  
獨唱

『めでた〜の若松さまよ

枝も榮ゆる葉もしげる』

右大臣 「めでたいなく、火鼠の毛皮を持って歸つた拙者、姫の婚がねは、かく言ふ右大臣阿部の御主人、竹取の翁よ、そこな四人は如何で御座つた。」

石作 「御心配めさるな、拙者が持つて參つた、石の鉢は木葉微塵に破れました。」

倉持 「華は黄金の玉の枝、蓬萊山いっはりたくみは眞赤な虚言細工人おきこの男が、持つて歸りました。」

大納言 「龍の首の五色の玉、思出すだに恐いこま〜。」

中納言 「我は燕の子安貝、羞しいやら腹立つやら。」

翁 「残るは右大臣殿、火鼠の毛皮一ツ。」

右大臣 「これは辱ない、そら拜すぞよ、皆の方々、エヘン、抑々これが天竺そらに名も高き某聖人おかしひじりの持つてゐる火鼠の毛皮、何なに驚いたであらうがナ。」



(ミ翁に渡す、皆々驚いて見て居る)

翁 「紺青色に光澤あつて、毛尖は光る黄金色、火にも焼ぬミ聞及ぶ稀有にたふき火鼠の毛皮。」

(と言ひながら、姫に渡す)

姫 「誠にうるはしき火鼠の毛皮。」

右大臣 「火鼠の毛皮で御座りませうがな。」

姫 「このやうな珍重な毛皮、さうして求められましたか。」

右大臣 「されば、身共の家來に小野房盛いふ器用人が御座つて、王卿ミ申す唐の商人にたのみ、大枚五千兩三年かゝつて、天竺より求めしもの。」

翁 「して其火鼠ミ申すものは。」

右大臣 獨唱 「昔々その昔、ズツト先の其昔

東夷南蠻北狄西戎唐天竺の其先の。

合唱 「だつたん國の山奥の、ある山寺の和尚さん、猫にかぶせた紙袋、ポント叩

けばニヤンと鳴く、ポボンのボンと叩く時、にやにやんのにやんとなく程に、炬燵の上の主人顔、夜は鼠の嫁が君、猫に追はれて埋火の、中にスツテンコロくと、不思議に焼けざる火鼠は、とれが虚言やら誠やら、白い黒いの鼠色」

(間奏)

右大臣 「いろで苦勞を、右大臣阿部の御主人、ホ、敬つて申す。」

(ミ右大臣の滑稽なる振事)

皆々 「ハ、面白やく。」

翁 「イヤ、珍らしき、火鼠の物語これは一段ミ興であつた、姫さう思はつしやる。」

姫 「火に焼けざる火鼠の毛皮、不思議な話ではありませぬか。」

翁 「幸ひの火桶、一ツ試みるこいたさう。」

大納言 「興ある事ぢや。」

中納言 「それは面白からう。」



右大臣 「火に焼て見ようと言はるゝのか。」

翁 「焼けぬ云ふ話ばかりでは物たらぬ様に思はれる、一ツ焼て見ようではないか。」

右大臣 「それもよからう。」

(姫、毛皮を火桶に入れると忽ちメラメラと燃ゆる)

右大臣 「これは不思議、燃ゆる出たぞ。」(と驚くことなし)

中納言 「ア、燃だした。」

倉持 「もゆるはく。」

翁 「あらく。」

右大臣 「あれよく。」

皆々 「あらく。」

右大臣 「あれよく。」

皆々 「笑止く。」

合唱 「笑止や笑止

アツハハ、アハハツハ  
アハハツハツハ  
笑止や笑止  
アツハハ、アハハツハ  
アハハツハツハ

(間奏)

右大臣 「おい、何が面白い、腹が立つわ大枚の五千兩、ミウミウ王卿奴にだまされた、僅の間に煙になつて、残るは灰ばかり、口惜しや、腹立しや、わ、面目もなや。」

倉持 「イヤ右大臣殿、そなた一人では御座らぬ、戀に破れた五人連。」

石作 「うらみツコが無うてよいではないか。」

翁 「若殿達よ、それもこれも時世時節ぢや、恨んで下さるな。」

(此間に五人の若殿皆々ほご能き處に立つ)

石作獨唱 「恨に思ふは男の恥



戀の重荷の石作

佛の前の石の鉢

木ツ葉微塵と破れたやうに

こゝろ残さず歸りませう」

倉持皇子  
獨唱

「高嶺の花と知り乍ら

折つて見たさの玉の枝

蓬萊山のつくりもの

うまい工もあらはれて

男の顔もどろだらけ

泥にゆかりの土藏の倉持」

大納言  
獨唱

「龍の首の五色の玉

とれぬばかりか荒浪の

中納言  
獨唱

汐につぶれた盲目の大納言

とんだ目に大伴の御行」

「軒の庇に立てかけた

竹の梯子に中納言

巢にてつかんだ燕の糞

臭くさひくと磯上の麻呂」

右大臣  
獨唱

「サテどん尻は火鼠の

貴い皮とだまされた

まことに金持右大臣

毛皮は燃わて灰となる

其白煙の阿部の御主人」

石作

「姿かたちはなよ竹の。」



倉持 「玉に輝くかぐや姫。」

大納言 「戀なればこそおめすおくせず。」

中納言 「逢ひに北より雁の。」

右大臣 「亂れて歸る五人連。」

翁 「日もくれ竹の笹の門。」

五人 「きれつれだつて歸るましませう。」

(此時中將高野大國登場、舞臺夕暮漸く夜の景色となる。)

中將 「暫時待たれよ、中將高野大國我が御主君の御使ひこして、かぐや姫お迎に參つたり。」

翁 「何ぞ御意あそばす。」

中將 「さればよ、なよ竹のかぐや姫、みめよきばかりか、御心まで萬人にすぐれ玉ふ、色好みの若殿原、そら、そこにも、こゝにも、雲霞の如く押寄せ玉ふこも、かりそめにも笑ひ玉はぬ神々しく、美しきを愛で玉ひ、呼び迎へよこの御上意、竹取の翁よ、そなたが手鹽にかけて、懐の玉に育てた甲斐あつて、やがては大内の花衣、いや、目出度く。」

翁 「中將殿、思もよらぬ御上意のおもむき、姫御聞きやつたか。」

姫 「悲しや、思もよらぬこゝも。」

姫翁唱 「むくろ津はふ下にも年はへぬる身の

何かは玉の臺うたなをば見む」

(間奏)

中將 「イヤ、それはならぬ、綸言は汗の如し、一度出て又歸らず、大御心の難有しは思はざるか。」

翁 「姫よ、如何にも中將殿の言はるゝ通り御上意の趣お受けいたすがよからう。」

姫 「翁よ、悲しきこゝになりました。」

翁 「姫よ、く。」

(此時姫の態度神々しく近づくべからざるやうに一變す、姫の姿より後光輝きはじむ)

姫 「大御心に反くにはあらねぎ、まこゝも、我は此世の人にあらず、翁よ、ゆるさせ玉へ、いつかは語り明さむと思ひたれぎ、かく速に別れねばならぬこゝのうたてき。」



翁 「ナニ、此世の人にあらずこ。」(驚く)

皆々 「此世の人にあらずこや。」

中將 「さればいつくの御方にて。」

翁 「おはしますぞ。」

姫獨唱 『月の都は我ふるさと』

合唱 『月の都が姫の故郷とや』

翁 「悲しやく、姫は此世の人でなく、月の都の姫君であつたけな、悲しや別れねばならぬ  
さか。」

(翁、悄然として泣く)

姫獨唱 『彼の大空にかゝやける

月の都は我ふるさと

假に姿をうつし世の

鏡に曇る松影を

疊にふむもこれかぎり

翁よさらばぞさらば

人々よ、さらばぞ、さらば』

(間奏)

合唱 『見よ、すみ渡る大空に

みがける如き満月は

富士の彼方に現れぬ

玉と輝くかくや姫』

(間奏)

『見よ、浮き雲は大空に

五色の如くいろとりて



下界に近く迫り来る

玉どかゝやくかくや姫』

(間奏)

皆々

「あれよ〜〜〜」。

(姫の妾天にのぼる)

(幕)

(白雲五色の光を放ちて姫をつゝむ、荘嚴なるオーケストラの中に姫雲につつて下界をはなる、)

歌劇『ダマスクスの三人娘』



登場人物

酒商	ノウフー	ード
客	ト	ンミ
同	ム	ーラ
同	ベ	ンニ
同	ノウフー	ードの妻
姉	アイ	バツト(啞)
妹	シャ	ロツク(盲)
人足	タイ	ネ
女王	侍	臣
守衛	數	名

場所

第一 ノウフー

第二 宮中法廷

「ダマスタスの三人組」

ト	ン	ミ	ー
ム	ー	ラ	ツ
ベ	ン	ニ	ー
鑿	井	浪	子
小	倉	み	ゆ
末	川	末	子





「モリスの三人組」

クニニ  
ムロセ  
イノミ

藤川末子  
小倉みゆき  
花井千



(第一場)

上手煉瓦造の酒蔵につまいて正面店先、下手いろくの瓶詰の酒をならべた隋圓形の酒賣臺、  
右手の隅のテーブルに主人のノウフード帳簿調べをして居る、中央の丸テーブルに常客のトン  
ミー、ムーラット、ベンニーの三人葡萄酒に酔つて、足拍子をこりながら面白さうに唄つて  
居る、酒賣臺の中にはノウフードの妻君ペーカン、コップを拭いて居る。

トンの唄

『何事も廻り合せだ此の世の中は  
一が五になる賽の目も』



それ、ふれ

やれ、ふれ

運が向けやお酒はたゞ呑る

たゞ呑る

たゞ呑る

たゞ呑るく

(賑かな合唱にて幕明く)

トンミー「お上さん、今日は御定連が少なくて淋しいなア(と言つてペーカンを見上げながら)何を言つても馬の耳にお念佛だ、だが、然しノウフド、お前の妻君が幸に豊だから此店が無事に繁昌するのだ、己許りではない誰でも左様言つてるぜ。」

ムーラ  
ツツ「左様だ正に其通りだ。」

ベンニー「取分トンミー君の如き今此バグダットの町で、天才自慢の男一匹が、毎日ノコノコ通つて来るのも其處には實もあり蓋もありさ。」

ノウフ  
「ペーカンが豊だから宅の店が繁昌するつて、それは又何いふ理由で御座います。」

トンミー「お前の女房は全體お主には過ぎて居る、それで、口説も痴話も起らないのは豊のお蔭だ、何人しも一寸取合ひ憎いからナ。」

ムーラ  
ツツ「ごうか知らんテ。」

ベンニー「ノウフド大に注意を要すべしだぞ。」

ノウフ  
「トンミーさん、御冗談は御免を蒙り度いね。」

トンミー「イヤ己ばかりではない、大概の若いものは酒でも呑めば誰でも左様だ、内所で小當りに冗談位は言つて見るものだ、それがペーカンミ來ては皆目御利益が無いから、豊の砲臺巖ミして抜くべからずだ、ノウフド、大に安心して可なりだ、なア、ムーラツト、ベンニ、左様だらうがな、ハ、ハ、ハ」

ムーラ  
ツツ「左様だこも。」

ノウフ  
「不相變面白いこを言つて笑はせますな。」

トンミー「笑はせる言へば、ペーカン、オイお上さん、お前さんチツミお愛嬌能く笑つて見せて



呉れては何ぢやらう。」

(大きい聲で言ふ、ペーカ聞ゆながらも莞爾と笑つて見せる)

ペーカン「トンミーさん。」

トンミー「オヤ聞ゆたかい、有難いね。」

ペーカン「ムーラツトさんも、ベンニーさんも、今日は御酒が少ないですね、先刻庫から出した許の白葡萄酒がありますよ、そらこんなに、まるで女王殿下の胸飾にある玉の様な光をしてゐませう。」

(と瓶を差上で見せる)

トンミー「お上さん巧いこを言つてお酒を飲すの、耳は遠くても商賣上手だから、オイ、ノウフー、有難く接吻してやりな。」

(と言ひながらトンミーもムーラツトもベンニーも酒賣臺に近づいて大盃に酒を注いで貰ふ、ノウフーは、しきりに帳簿をつけて居ると、下手からヴァイオリンに合せて唄ふ歌が近づいて来る)

唄

『でんぐ／＼蟲々かたつむり

お前の頭はどこにある

角出せ鎗出せ頭出せ』

『でん／＼蟲々かたつむり

お前の目玉はどこにある

角出せ槍出せ目玉出せ』

(間奏)

『かゝあが角出しや格氣のしるしだ

奴が槍出せや殿様お馬だ

親父が目玉出しや怒つたしるしだ』

(間奏)

『おゝ恐



おゝ恐

恐はい時きや逃げるよ』

(間奏)

『蛙はびよこ〜』

家鴨あひるはのた〜』

お馬うまはひん〜』

狗兒いぬごわん〜』

三毛猫にやん〜』

『そら飛べ

やれ飛べ

逃げるが勝ちなら

デン〜蟲しやノロ〜』

芋蟲コロ〜』

なめくじやヌラ〜』

すべツてころんだ

酒屋の店先で』

(間奏)

『一人ひとりが怒れば

一人ひとりが泣き出す

一人ひとりが笑つて

三人上戸の

機嫌が直れば

そら来い

やれ来い』



(間奏)

「出て来い〜池の鯉

底のまこもの茂つた中に

手のなる音を

聞いたらこい〜」

「出てこい〜池の鯉

底のまこもの茂つた中に

なげたる焼ふが

見ねたら来い〜」

(姉妹アイバット(啞)ヴァイオリンを弾き妹娘シャロック(盲)唄ひながら登場、酒屋の前にて

一しきり唄ふ)

トンミー「ノウフド、何ミ面白い歌ではないか此歌は昔からダマスキスで名高い誦りだミ聞いて

居る、それが近頃此のバグダットで流行り出したのは、さては姉妹の歌唄女が持つて来たものご見る、ノウフド、何ミ面白い歌ではないか、これで白葡萄酒が一入うまく飲める云ふものだ、お上さん耳が遠く共お前にも少しは聞けたであらう。」

ムーラ  
ツト 「中々面白い歌だ。」

ベンニー「も一度唄つて貰はうでは無いか。」

トンミー「それがよからう。」

ノウフド 「お客様が唄へミ仰言る、ベーカン、お前も能く聞て居な、ダマスキスの歌ぢやさうな。」

シャロック 「難有う御座います、アイバット頼みますよ。」

アイバット 「……………」(うなづいてヴァイオリンの調子を合す)

ムーラ  
ツト 「トンミー、よく見い、此二人はお上さんによく似て居るではないか、なんご不思議な位

よく似て居る。」

トンミー「成程な瓜ニツミ言ひたいが、歌唄の姉妹ミ合せて瓜三ツだ、不思議に似たものだな。」  
ベンニー「これは妙だ。」



(と見較べて感心して居る、ノウフードも此話に初めて気が付いて不思議そうな顔をして居る、其中にデン／＼蟲々の歌を唄ひ出すとベーカンも又不思議さうに二人の歌唄を見て居たが、若しや故郷に残つて居た自分の姉二人ではないかと思付て、俄に心配顔になる、唄の進むにつれて、トンミー、ムーラット、ベンニーの三人は踊り出す、ノウフードは妻の心配顔を見て、じきりに氣にして居る、其中に踊がすむ、)

ムーラ  
ツト 「面白かつた〜。」

ベンニー 「此興味の退ぬ中に一先づ歸るにせうではないか。」

トンミー 「それもよからう、そら、ヴァイオリンの娘、お金を進るよ。」

アイバ  
ツト 「……………」

(お金を受取つてシャロツクに手渡する)

シャロ  
ツク 「大きに難有うムいます。」

ベンニー 「ヴァイオリンの娘の子、お前方の名は何と言ふのかな。」

シャロ  
ツク 「アイバツトに申します、妾はシャロツク。」

ムーラ  
ツト 「何處からお出たな。」

シャロ  
ツク 「ダマスキスから。」

ノウフ  
「はい、ダマスキス。」

(と言つて妻のベーカンを見るベーカンは黙つて横を向いて居た)

トンミー 「イヤ、遠い處から来たものぢや、何か他に親の敵でも打たうこいふ深い考があるのかな。」

シャロ  
ツク 「イ、エ、親の敵云ふ様な恐しい事ではありません、子供の時に別れた唯一人の妹に遇たいと思ひまして。」

トンミー 「それは可愛さうな話だ、少し心當りでもあるこいふかなア。」

シャロ  
ツク 「イ、エ」

(アイバツトはベーカンを見乍らシャロツクの手を握るけれど、シャロツクには通じない)

トンミー 「マア其中に神様が遇せて呉れるだらう、され已達も誰ぞに遇ひに歸るにせうかい。」

ムーラ  
ツト 「さア歸らう、ベーカン又明日来るよ、シャロツクと言つたの、お前の唄も又此次何處ぞで聞かせて貰ひませうナ。」



ベンニー「左様なら、アイバット又何處ぞで遇ひませうよ。」(三人揚退)  
ノウフ「左様なら又お出で下さいまし。」

(と言ひながら其邊を片付けて居る、姉嬢のアイバットはベーカンを見た時から自分の妹ではないかと思ふけれど、啞だから言ふことが出来ない、妹のシャロツクは盲だから判らない)  
「大に難有御座いました、さア、アイバット歸ませう。」

(と言ふけれど、アイバットは動かうとはしない静とシャロツクの手を握つて引寄せて居る)  
「アイバットさア行きませう。」

アイバ  
ツト「……………」

(行かうとしないで却つてノウフの傍に連れてゆく)  
「さうしたのか、何か用事でもあるのかい。」

シャ  
ツク「イーエ。」

(と言ふと、アイバットはシャロツクの手を力委せに引く)

シャ  
ツク「ハイ。」

ノウ  
フ「何か用事かい。」

(アイバットはシャロツクの手を取つていろく合圖をしたので、シャロツクも初て心付く)  
「誠に突然妙な事をお尋ねいたしますが、此御近所にベーカン云ふ女のお家は御座いませんでせうか、確か、酒屋さんの奥様になつて居るさうで御座いますが。」

ノウ  
フ「酒屋の奥様？ その酒屋云ふのは何さいふお家ぢや。」

シャ  
ツク「たしか、ノウフドさんご聞て居ります。」

ノウ  
フ「ノウフド、それは私の事ぢやが……………」

「はい貴方様がノウフド様、アノそれでは、ベーカンは無事で居りますか。」

「ベーカンは私の女房、そらそこに無事に居る、が、然しお前方は。」

(アイバット此話を聞いて飛立つ計りに喜ぶ、ノウフドは、紙片に二人のことを書いてベーカんに渡すベーカンは夫を讀んで非常に驚く。)

「はい妹が無事で居りますと、アイバット、お前ベーカンが見ゆるであらう、早く此處へ



連れて来て下さらぬか、ペーカンく。」

(アイバットは酒賣臺に近付いてペーカンの袖にすがる、ペーカンは横を向いて振放す)

ペーカン「妾は、妾はこんな袖乞のやうな女は知りませぬ、妾にはアイバット云ふ姉はありませぬ。シャロツク言ふ姉もありません、ノウフードく、早くく此女袖乞を追出して下さいく。」

ツヤロ「あの聲は聞き覺わのある、ペーカンの聲ぢや、ペーカンく、遇ひたかつたく、まアお前に遇ひたい斗りに何位苦勞したものであらう、アイバット、お前はペーカンが見ゆるであらう、羨しいく、妹を放してはならぬぞよ、妾にも、早く握手をさせてくれ。」

ノウフ「さてはお前方はペーカンの姉であつたのか、可愛さうにマダスクスから尋ねて來られたのか、よろしいく、私が心得て居る二人共親船に乗つた氣で安心するがよい。」

ツヤロ「嬉しいく、ノウフレド殿が助けて下さるごか、ペーカンく何處に居るのぢや。」

(アイバットはシャロツクを連れてペーカンの傍に行く、ペーカンは二人を振放して逃げながら)

ペーカン「妾は、妾は、こんな歌唄の同胞は持ちません、ノウフード、二人にだまされてはいけま

せん、早く二人を追出して下さい、早く追出して下さい、二人を追出さなければ、妾は暫く出てゆきます、ノウフード、妾を助けて下さい、妾に、お前が昔妾の足元に接吻した時の愛情があるならば、早く妾を助けて下さい。」

ノウフ「まア靜になさい、アイバットも、シャロツクも、たつた一人のお前を頼りに、彼の不自由な體でバグダツトまで尋ねて來てくれたものだ、さう無情言ふものではない。」

ツヤロ「ありがたう御座います。」

(ペーカンは狂的になつて)

ペーカン「妾、妾、知りませぬく、ノウフード妾を助けて下さい、神よ、タイギリスの水の神よ、弱き妾を助けて下さい、く。」

(と叫びながらアイバットの追ひすがるのを振りのけて、表の方へ出てゆく、シャロツクはノウフードの足元にひざまづいて祈つて居る)

ノウフ「ア、困つた事になつた、ペーカンく。」

(と言ひ乍後を追ひする時、また、トンミー、ムーラツト、ベンニーの三人がデンく蟲々の



歌を唄ひながら、踊りつゝ来るのを見て、ノウフードは、アイバットミシヤロツクを周章て酒庫に隠す、三人は一しきり踊りがすむ。

トンミー「ノウフード、ベーカンは見ぬやうだが何處へ行つた。」

ノウフ「一寸問屋まで買物に出しました。」

ムーラ「それではお酒も、うまく飲めなからう、又明日にしようではないか、ペンニー。」

ペンニー「それもよからう。」

トンミー「ノウフード、ダマスキスから来たさういふ、先刻の二人の娘、あの歌唄ひの娘は何方へ行つた。」

ノウフ「唄ひながら向うの方へ行つたやうです。」

ムーラ「美しい聲だつたな、あの聲の爲めにデン／＼蟲々の踊りが、バグダットに大流行きは、妙なこゝみがあればあるものだ。」

トンマー「矢張、此店は何ほ豊でも、ベーカンを居らなければ駄目だ、面白くないな。」

ツト「又出直すませう。」

トンミー「角出せ」

槍出せ

頭出せ

ムーラツト「角出せ」

槍出せ

目玉出せ

(唄ひながら退場、夕暮より夜景に移る)

ノウフ「ヤレ／＼今日は何ミ云ふ忙ない日であらう、酒庫へ隠して置た、アイバットにシヤロツク、さぞ待遠しからう、お腹も空いたであらう、其中にはベーカンを歸るであらう、一時は何う考へ違があつても根は切ても切れぬ姉妹同志、いづれは仲好うなるに違ない、これ、すこしも早く酒庫から出して喜ばせてやるませう。」

(ノウフードが酒庫へ行くと同時に、下手から人足のダイナー、唄ひながら登場、貧乏徳利をさげて酒を買ひに来る)



タイネー 獨唱 『酒の力を假寝の夢が

さめてうつゝの戻り道

戀の重荷をエンサカホイ〜』

『世辭のよいのに又だまされて

通ふ柳の五條坂

戀の重荷をエンサカホイ〜』

タイネー 「おゝ、ベーカン様、奥様、今日は樽のこほれ酒はありませぬかい、や、ベーカン様は居りませぬな 旦那様、ノウフード様、今日はこほれ酒はありませぬかい、旦那様もお留守  
み見わる、ハテ物騒な、若し旦那様、ノウフード様。」

(ミ酒庫の方を見て呼んで居る、此時ノウフードは顔色を變へて酒庫から出て来て、タイネーを見て狼狽する)

ノウフ 「ヤ、お前はタイネー、ア、よい所へ来てくれた、實はお前に頼み度いこゝがある駄賃は平常の三倍上げるから、私の頼むものをタイグリースの川へ放棄して来ては下さらぬか。」

タイネー 「それはお安い御用です、其捨てるものミ申しますのは。」

ノウフ 「實はな、酔倒れが出来たのぢや、通りすがりの旅の人、自宅から葬式を出す事も出来な  
い此町に縁の無い人ぢや、川に捨てるのだ、タイグリースの神様へのお供物、我も其方も神  
様への御奉公ぢや、宜敷頼むぞよ。」

タイネー 「それはかたじけない、神よ、タイグリースの神よ。」

(ミタイネーひざまづいて御祈を上げて居る、其間にノウフードは袋に入れた一人の死體を酒  
庫から持つて来る)

ノウフ 「サア、これだ、宜敷たのんだぞよ。」

タイネー 「思つたより軽いぢや。」

ノウフ 「お前は強力ぢや、軽からうがな。」

タイネー 「それでは一走り。」

ノウフ 「頼んだぞよ。」

(タイネーはエンサカホイの歌を唄ひながら袋を擔いで退場)



ノウフ 「ハテサテ、何ぞ不思議な事であらう、可愛さうなのはアイバットにシャロツクの二人ぢや、先刻の踊の騒ぎに周章狼狽して酒庫に隠して置いてから、寒からう餓じからうと思つて連出さうとしたら、これは又意外千萬、もう鐵のやうに冷くなつて、何時の間にか死んで居つた、女房のペーカンにも内證の出来事であつて見れば、今更ら自宅から葬式を出す譯にもゆかず、思案にくれて居るに、幸にあの御人よしのタイチー、巧く欺してやつたけれどもう一人片付けなければならぬ、タイチーの奴、早く歸つてくれればよいがなア。」

(そこらあたりを片付けて居るに、タイネー空袋を背負つてニコ／＼顔で出て来る)

タイネー 「旦那様、早いものでせう、チャント捨て参りました、が然し、可愛らしい娘の子、可愛想なこゝで御座いました。」

ノウフ 「タイチー、お前、虚言を言ふてはいけない、虚言を言ふに、お前の體を、タイグリースの水の神様に捧げなくてはならぬ事を能く心得て居ようがな。」

タイネー 「それは能く心得て居ります。」

ノウフ 「それなれば眞直に白狀しなくてはいけない、お前が捨て、来たこゝいふ其娘は、さうの昔

に酒庫に歸つて来て居るではないか。」

タイネー 「ノウフ様、旦那様、御冗談を仰有つては困ります。」

ノウフ 「冗談ではない私は虚言は言はない。」

タイネー 「捨て、来たものが歸つて来るこゝいふやうな、其様な不思議な事がありますものか。」

ノウフ 「何が不思議なものか、虚言と思はゞ、マア、兎も角も酒庫迄来て見るがよい。」

(タイネー、ノウフに誘はれて酒庫の入口から中をのぞいて見て驚く)

タイネー 「實に不思議だ、奇怪千萬な話だ、確かに捨て来た娘が、もうちやんこ歸つて居る、何ぞ云ふ不思議な話であらう。」

ノウフ 「タイチー、此度は再び歸らぬやうに確かに捨て、来てくれ、よろしいか。」

タイネー 「不思議な話だ、丸でアラビヤの物語にでもある様なものぢや。」

(と言ひながら二人で袋に入れる)

ノウフ 「御苦勞だ、も一度頼んだぞよ。」

タイネー 「確に捨て、来たのに、直ぐ歸つて、不思議な話だ、此度は其の手は食はぬぞ。」



(タイネー再び唄ひながら擔いで出て行く)

ノウフ 「お人好のタイチー、さうく欺してやつた、アイバットに、シャロツクを一人だと思つて居る、然し一人と思ふのも實は無理もない、能くも似たものた、それに女房のペーカン、姉妹は云ふものゝ、頬の黒子まで似て居る、三子とは云ひぜう、誰彼の差別は到底も出来まい、強ちタイチーがお人好と言ふ譯でもあるまい。」

(一人言云ひ乍ら、そこらあたりを片付けて居るミ、タイネー此度は袋を持たずに歸つて来る)

タイネー 「旦那様、歸りましたぞよ、然し此度はさわらい目に合ひましたぞ。」

ノウフ 「それは又何云ふ目に遭つたのぢや、確に捨て来たであらうがな。」

タイネー 「捨て来ました、が、此度は、アノ娘子幽霊になつてな。」

ノウフ 「なんぢや幽霊に。」

タイネー 「さればさあ、今日位不思議なことはありませぬ、又歸つて来られては、大變な無駄足をすると思ひましたから、タイグリースの彼の渦巻く荒瀬の岩の傍から、ドボンと投げ込み、サア今度は大丈夫だらうミ、空袋を擔いで歸つて来るミ、丁度お店の向ふの、四ツ角を曲

らうミする處で、彼方から提灯を提た女が急足に來るではありませんか、すれ違ひに不圖、其女の顔を見るミ、これは不思議、今確かに捨て来た女に寸分異はず頬べたの黒子までが似て居る、ヤツ此の化物め、今度は生き回つて來やがつたな、汝の爲めに二度も三度も餘計な苦勞をさせられて居る、幽霊め憎い奴ぢや、今度は何するか見ろミ、唐突に襟髪を捕へて慌て、振放さうミするのを、カまかせに振ち伏せて袋の中へ押込み、今度はさうしても出て來ない様に、袋の口をしつかり結んで、袋ぐるみ川の中へ投げ込んで來ましたが、さうです、旦那様、もう歸つて來ては居りますまいが。」

ノウフ 「はい、宅の向ふの四ツ角で遇つた生た人間が。」

タイネー 「それが幽霊でがした。」

ノウフ 「幽霊?もしや人違ひではないか。」

タイネー 「人違ひどころか、初めの女に瓜二ツ、正に判然と幽霊だ。」

ノウフ 「しまった! タイチー、それは幽霊ではない、己れの女房だ、女房のペーカんだ。」

タイネー 「はい、旦那様の奥様、ペーカン様だミ。」



ノウフ 「ペーカンだ、ペーカンに違ひない、コラ、タイチー、誰が宅の女房を川へ投げ込めと言つた、サア、早く行つて助けて来い、タイチー、お前人殺の大罪人だ、己は許すこゝは出来ぬ、女王陛下に訴へるぞ、タイチー、早く行け、タイグリースの渦巻く荒瀬の岩に早くゆけ、神よ、神よ、愛するペーカンを助け玉へ〜〜。」

(と狂氣の様に騒ぐ、タイネー、うろ〜として居る、幕)

(第二場)

正面小高き所玉座、左右に侍臣數名着席、一段下つて平舞臺上手に守衛數名着席、舞臺中程にノウフ、タイネー、立たま、向合つて居る、下手参考人席に、トンミー、ムーラット、ベ  
ンニー着席、宮中裁判廷の場

(幕明く)

侍臣甲 「何れも間違の無い様に、凡て用意は整うて居るであらうな」

侍臣乙 「程なく陛下には御出座になる順序である失禮のない様に注意するがよからう。」

(ノウフ、タイネー、黙つてうなづきながら敬禮する)

「御出座」

(と舞臺裏にて呼ぶと、一同起立敬禮、女王陛下音楽につれて登場、正面玉座に着席)

侍臣甲 「ノウフの訴によつて陛下御親ら御裁断あらせらるゝにより腹藏なく申立てよ。」

侍臣乙 「原告ノウフ、面を上げ、被告タイチー面を上げ。」

女王陛下 「原告ノウフの訴の目的を有のまゝに申すがよい、其の方の妻ペーカンは、何故にタイチーに殺されたか申すのか、それには又確なる證據があるであらうな。」

ノウフ 「恐れながら申上り、タイチーは私の妻のペーカンを生きながら袋の中へ入れまして、タイグリースの川へ投げ込んだのに違ひありません、實は其晩も夜中迄には、若しや歸つて参りはせぬか、心待に待つて居りました、そのみならず心當りの先をいろ〜探しましたけれど、一向に姿が御座りませぬので、さうしても、タイチーが袋の中に生きながら押込でタイグリースの川へ捨てた云ふ其の女が確に私の妻のペーカンに相違御座いませんから、何卒、御處分をお願い申します。」

女王陛下 「タイチー、其方は、何ぞ心得て生きた女を袋の中に押込んで川へ捨てる云ふ様な慘酷なこ



「をしたものぢや、それには何か深き仔細があるであらうな。」

タイネー「女王陛下、一向に私には何の仔細もありませんでした、私は只幽霊と思ひましたので、只今も尙、生きた女はさうしても信ずるこゝが出来ませぬ、實際又、幽霊に違ひないで御座います。」

女王陛下「ペーカン<sup>ペーカン</sup>を幽霊と間違へたのではあるまいか。」

タイネー「ペーカン、ペーカン、(と考へて)成程ペーカンによく似て居りました、然しどうしても幽霊に違ひないのは、丁度それが二度目で御座いましたから。」

女王陛下「何? 二度目と云ふ理由は。」

タイネー「前に一度歸つて参りましたから。」

女王陛下「前に一度歸つた云ふのか。」

タイネー「左様に御座います、ノウフードの旦那様に頼まれて、女乞食の行倒を一人、タイグリースの水の神様へお供<sup>まな</sup>いたすこゝになりました、酒庫<sup>さけくら</sup>から出して袋に入れて川に捨て歸つて参ります、ノウフードの旦那様の申されますには、タイチーお前眞當に捨て、來た

のか、タイグリースの渦巻く荒瀬の岩に捨て來たものではあるまい、若し實際捨て來たものならば歸つて來る筈は無い、それにもうちやんを歸つて居る、能く見るがよいと申されまして、酒庫につれて行かれました、見るに、捨て來た女が全く歸つて居たので御座います、陛下、何ぞ不思議では御座いませんか、そこで又捨てに行きました、其歸り途に其の死なごおなじ生きた女に遇ひましたので、サテは又生きて歸つて來た幽霊に違ひないと思ひましたから、袋の中に押込めて、再び化て來ぬ様に此度は袋のまゝ捨てたので御座います。」

女王陛下「ノウフード、捨て死人が再び酒庫に歸つた云ふのは不思議では無いか、何か仔細<sup>しじ</sup>がありさうに思はれるがさうぢや。」

ノウフード「恐れ入りました御座います、實は歸つたのでは御座いません、初めから同じ死人が二人ありましたので。」

女王陛下「同じ死人が二人あつた云ふのか。」

ノウフード「左様に御座います。」

(タイネー驚いてノウフードの顔を見る)



女王陛下「さう云ふ理由ぢや。」

「それは斯様に御座います、私の女房には故郷のダマスキスに、姉が二人御座いましたが、それは可愛さうに一人は啞、一人は盲目二人共片輪な爲めに、不幸が重なつてさうたう歌唄に迄零落して仕舞まして、此の町に妹のペーカンを尋ねて参りましたので御座います、私は餘り可愛さうで御座いましたから心快くペーカンも姉妹の名のりもさせ、三人睦じく暮らさせ度い考で居りましたが、本人のペーカンが、さうしても自分の同胞ではない、自分には女乞食の啞や盲の姉はないと申しまして、早く追出せよと申しますけれど、遠い處から参りました片輪もの、餘り可愛さうゆゑ勞はつて居りますよ、ペーカンは腹立しく表へ出て行きました、私は二人の女に、安心するがよい、屹度助けてやるよ、話をして居る時に、茲に居られます三人のお客様が、踊り乍らお遊びに御越になりました故、暫く酒庫の中に隠したので御座います、其の中に御客様が御歸りになりましたから、酒庫へ行つて見ますよ、さう云ふ譯か知りませんが、二人共倒れて死で居るので御座います。」

女王陛下「死んで居つたよ申すのか。」

ノウフ

「左様で御座います、ペーカンには初めから内證の事で御座いますから、其の死骸をさうする事も出来ませぬので途方に暮れて居りますよ、幸にタイチーが参りましたから駄賃を三倍取らせませす事にしまして、タイグリースの川の神様に御供する事に致したので御座います。」

女王陛下「さうするよ二人の死骸を初めから一人だぞ欺き、一人分の駄賃で二人を始末しようとした、惣から起つたよこであらうな。」

ノウフ

「恐れ入りました御座います。」

女王陛下「して見るよ、タイチーが飽までも幽霊よ心得、生擒にして袋の中に押込めて捨た譯で、決して只の殺人ではない、それもノウフドが最初にタイチーを誑し捨てたものが歸つて来たなき、詐りを申したから、さう云ふ間違が起つた譯であるのに、其罪はノウフドにこそあれ、決してタイチーにはないのである、左様であらうがな。」

ノウフ

「恐れ入りました御座います。」

タイネー「ありがたう御座います。」



女王陛下「然し、ノウフド、其方は又心掛のよい男である、ペーカンが拒むにも拘らず、其の姉妹を助けようとした、其慈悲心は過つて二人を死なしめたとしても、これを償ふことが出来るから、神様の名に依つて其方も赦して遣はす。」

ノウフド「難有う御座います。」

女王陛下「ノウフド、タイチー、判決に異議はないなう。」

兩人「難有う御座います。」

女王陛下「判決に異議がなければ、其方共に見せるべきものがある、暫く其處に立つて居るがよい。」

(女王陛下は何か侍臣に合圖をする、下手の窓の幕が上る、其處には死んだと思つた三人の姉妹がちやんと蘇生つて同一服装で立つて居る)

タイネー「おや〜〜」

ノウフド「おや〜〜、ペーカン〜」

(トンミー、ムーラット、ベンニーの三人も不思議に見られてさゝやいて居る、女王陛下は面白さうな笑顔にて)

女王陛下「ノウフド、可憐なる三人の姉妹は、皆蘇生て此處に居る、此中で其の方の妻は、何れであるか心得て居るであらう。」

(ノウフド、ジロ〜見ながら、不思議さうに考へて居る)

女王陛下「三人の姉妹の中に此のノウフドの妻があるならば遠慮なく一步前に進め。」

ノウフド「恐れながら申上ます、私の妻ペーカンは幼き時から聾で御座いますから、陛下の思召も一向に聴ぬぬので御座います。」

女王陛下「成程左様であつた、よろしい、然らば啞のアイバットはヴァイオリンの妙手、盲のシャロツクは唄が上手と聞く、一人にヴァイオリンを取らせよ。」

(侍臣の一人ヴァイオリンを持出し三人の前に進み黙つて突出す、アイバット之を受取り、思はず知らず弾き出すと、それに伴つて、シャロツク唄ひ出す)

シャロツク獨唱「トコ、ドンドコ、ビイ、ヒヤラ、ヒヤア

親が太鼓打ちや子が踊る  
角兵衛〜とはやされて



股の下から峠を見れば  
わしが國さの雪がふる』

(間奏)

『トコ、ドンドコ、ビイ、ヒヤラ、ヒヤア

居ながら渡る石橋に

蜻蛉がへりの日は暮れて

旅宿をとるにも銭は無し

相の土山雨がふる』

(此唄が初まるこ、ノウフードは残れる他の一人の女がベーカンであると言ふこことが分つたから喜んで居る。女王陛下は唄を聞きながら紙に何か書いて居たが、唄がすむと、其を侍臣に渡す、侍臣は夫をベーカンに渡す、ベーカン受取つて見て、恐るゝ讀む)

ベーカン「今日の裁判の第一の源因はベーカンが可憐なる姉二人に對し姉妹名のり合すして追拂はんとするが如き慘酷無慈悲の行爲ありたるに源因す、されば、生き乍ら袋の中に押込

められ水中に投ぜらるゝが如きは、誠に自業自得にして天罰云ふべきもの、しかるに、幸に神の恵のみに、姉妹三人救はるゝ、こゝを得たる以上は、將來長く互に助け合ふて、仲睦じく新しき生涯に入るべし。」

ベーカン「ありがたう御座います、女王陛下、妾が犯せる罪を赦し玉へく。」  
ノウフ「女王陛下、ベーカンを赦し玉へ。」

女王陛下「お前方が善心に歸れば神の御心に二ツは無いのである、さうして此世の中には、前世の罪惡の犠牲となつて、生れながらの片輪ものがある、啞のアイバット、明盲のシャロック、聾のベーカンの如き、憐むべき姉妹もある、然し、一度タイグリースの水の神様に其の生命を捧けたる時は、あらゆる罪障はそれによつて消えてなくなるものである、神の恵の厚き幸福なる三人の姉妹は、不思議なる運命によつて蘇生たのである、即ち、アイバット、シャロックは餓じき時に強烈なる燒酎の氣に酔つて一時氣絶した許りであつた、又ベーカンは袋の中に入れられ其の袋の口を堅く締められた爲めに却つて水に溺れずすんだのである、幸に漁師に助けられて如此蘇生て見るこ、お前達は新らしく再び生れて來たこ同



じものである。」

(女王陛下は、かう言ひ乍ら静かに立上つて天に向つて祈を捧げる)

女王陛下「神よ、彼等に新らしき靈魂を授け玉へ。」

(壯嚴なるオーケストラに連れて暫く黙禱して徐ろに)

女王陛下「ペーカン」

ペーカン「女王陛下、アツ聞えます、妾の耳は聞えます、陛下私には能く聞えます(面白き小鳥の啼く聲聞ゆ)ア、面白い音が聞えます、もう私は聾ではありません、ノウフードく。」

(と嬉しさに呼ぶ)

ノウフ  
「ド」 「ペーカン！」

(飛立つばかり嬉しさに言ふ)

ペーカン「ノウフード、能く聞えます、女王陛下く。」

(と脆いて感謝する)

女王陛下「アイバット。」

アイバ  
ツト「女王陛下！、ア、妾には物が言へます陛下く、シャロツクく、陛下の御みいつによ

つて、アイバットには物が言へます。」

(と同じくひざまづいて感謝するシャロツク驚きながら喜んで居る)

女王陛下「シャロツク」

ツシャロ  
ツク「アツ、女王陛下！ 妾には、妾には、此の美しい宮殿が見るのでございます、アイバ

ツト、ペーカン、もう妾は盲ではないのでありますか。」

(と言つて同じくひざまづいて感謝する、皆々不思議さうにさゝやいて喜んで居る)

女王陛下「お前達は斯の如く神の御恵によつて三人の姉妹が新しい生命を得たのであるから、末長く互にいつくしみ合はねばなりません。」

ペーカン「女王陛下、我が母よ、恵を垂れ玉へ。」

ノウフ  
「ド」 「トンミー殿、ベンニー殿、ムーラツト殿、女王陛下の御博愛<sup>かんなきけ</sup>に不思議な神の御恵みに感

謝して下さらぬか。」

トンミー「女王陛下の御恵のもごに、なんぞノウフード幸福なる三人の娘の輝く美しい眼に」



ムーラ 「花のやうな笑顔さ。」

ツト 「鴛の様に唄ひ鳩のやうに舞ふ。」

ベンニー 「鴛の様に唄ひ鳩のやうに舞ふ。」

トシミ 「ダマスキスの『雲の踊』を女王陛下の御前に捧ぐるがよからう。」

ノウフ 「それはよい注意である、アイバット、シャロツク、ペーカン。」

三人 「女王陛下の御前に於て。」  
(三人黙禮静かに進み出で、踊る)

雲の踊の歌

『天津御空を眺むれば』

雲に住む神笑ふ時

色紫に棚引て

天女の衣 翻り

舞の綾衣美しき』

『白きは輕き綿の雲』

うす 紅は花の雲』

夕にてらす黄金雲』

朝に輝く朱の雲』

『見よや、見よ』

雲の御空を見よや、見よ』

『美しき雲、奇しき雲』

亂る、雲や、散る雲や』

『流る、雲や湧く雲や』

おそろしき雲さまざまに』

渦巻く雲やする墨に』

うそぶく神の怒る時』



『きらめく電火いなづま』

轟く雷いかづち

おどろくと荒れ狂ふ

篠突く雨しのつ

逆巻く嵐』

『此世をつゝむ黒雲を

またゝく拂ふ時津風

晴れて今宵こよひの月清く

喜ぶ神の唄ふ時』

『見よや、見よ

月の御空を見よや、見よ』

『漂ふ雲や迷ふ雲

浮べる雲や遊ぶ雲

遮ぎる雲や通ふ雲』

『月の光のいろく〜に

その群雲むらぐもの弄もよほぶ

天女の衣ひるがへり

舞の綾衣あやぎぬ美しき』

『天女の衣ひるがへり

舞の綾衣あやぎぬ美しき』

(此踊の中程よりトンミー、ムーラット、ペンニー、ノウフード、ダイネーも交て賑に踊る幕)



劇歌  
松風村雨

野村胡堂

中野実

山田五十鈴

演

野村胡堂

中野実

松風村雨  
天来りて心も静か  
雨の音も心も静か  
天来りて心も静か  
雨の音も心も静か  
天来りて心も静か  
雨の音も心も静か  
天来りて心も静か  
雨の音も心も静か



登場人物

中納言行平

海女 松風

同 村雨

其他海士大勢

場所

第一 須磨の浦邊

第二 松風村雨住居

村雨

松風村雨

中納言行平朝臣

松風

村雨

由良道子

雲井浪子

大江文子





中  
 國  
 音  
 律  
 平  
 調  
 引  
 鳳  
 鳴  
 雨

大  
 馬  
 文  
 千  
 千  
 千



(第一場)

正面 青海原に淡路島の遠見、磯馴松、海岸に小船一隻凡て須磨の浦景色  
(踊のメロデーにつれて幕明くと大漁祝の海士の總踊)

『須磨の浦邊は磯馴小松』

月の眺めはわけてよい』

『波も靜かに渚にいれば』

玉の眞砂のうるはしや』

松風村雨



玉の眞砂のうつくしや

「袂つらねて磯吹く風に

踊る踊り子うつくしや」

「ぬしは舵とる私や漁りの

ぬれて嬉しい妹背貝」

「千代をちぎりの踊り唄

東白めば鹽風わたる

磯の小松に千代の色」

(間奏)

「殿の姿の花あやめ

綾の川水せき入れて

色紫の眞心は

捧げますぞへ此君に」

(間奏)

「青い海ならよいけしき

晴れの衣裳ならよい乙女

わたしや二八の花姿

唄は若衆の伊達姿」

(間奏)

「唄に太鼓によい踊り子の

晴れの衣裳のよい乙女」

「空も心も隅なく晴れし

月の眺めの淡路しま」

「松の舞子のよい枝振りど



合せ鏡の須磨明石

(問 奏)

「今日と明けゆく渚の水に

映る青葉の山の影」

「清き乙女の塩たくつとめ

聲も氣もすむ流行唄」

「圓いうちははに揃ひの着物

聲も揃へば氣も揃ふ」

「船も漕ぎませう潮も汲まう

おらが殿御はおよろこび」

(海士踊り乍ら下手に入る小船の苦を開けて村風村雨出づ)

松風

「あれ見や、村雨楽しさうな海士の一群、踊り狂ふ羨ましさ、それに引かへ我等二人は世

を忍ぶ日影の身、梢を照す月の光、其松風に心もおくれ、真砂に輝く、汀の囁やき、波の音にも胸をさる、落人の果敢なき身の上。」

村雨

「波に漂ふ小船にゆられて、知らぬ濱邊の苫の中、やうくこゝまで落延びはしたけれど、

明日をも知られぬ露の命。」

松風

「をんな二人のしがなきかひなに。」

村雨

「ごうなる事で。」

松風

「御座りませう。」

村雨

「さういふ中にも兵衛ぎの、早う戻つて来さうなもの。」

松風

「待遠しい事では御座りませぬか。」

村雨

「オ、戻られたさうな、あの足音は。」

松風

「兵衛ぎの戻つてかいな——」

(二人上手を眺めて居るに、行平朝臣登場、怪しみつゝ近寄り来る、松風村雨驚く)

行平

「ついに見なれぬ怪しの女子、そち達は何者、何處へ渡らんす所存なるか。」



松風 「ハイ、卑しき賤の女、お恥しゆ存じます。」

行平 「申されな、卑しき賤の女さよ、こゝらあたりの海士も覺ぬ、藤たけたる温容、都のもの、忍び姿か、嬪き女の供をも連れず、波を横切り小舟を捨て、須磨の浦曲の濱傳ひ、月に浮るゝ風情も見ぬ、如何にもいぶかしき此場の有様(ごつと見ながら)深き仔細のある事ならん。」

松風 「云ふも憂し、いはぬもうしや片男波。」

松風獨唱 『白波の寄する渚に世を過す』

蟻の子なれば宿も定めず』

村雨 「思ひもよらぬ無實の濕衣」

松風 「汐たく海士の卑しの身の上。」

松風村雨 「お疑ひお晴し下さりませ。」

行平 「如何様に申さるゝ共、合點のゆかぬ女性が身の上、仔細のあるに極まつたり、折柄月も冴ぬ渡る、一樹の影にも情あればお心置なくお語り召され。」

松風 「して。」

村雨 「御身様は。」

(行平捨石に腰かけて親みやすく話かける、松風村雨はくしながら下手に坐る、其間も絶えず兵衛を心待つ振り)

行平 「聞まほしき思ふ時は、先づ拙者の身の上より、申明かさむこそ禮さかや、一樹の影も多少の縁。」

松風 「千草にすだく蟲の音の。」

村雨 「哀れに聞くも情あり。」

行平 「一河の流れに人の行末先づ拙者より、物語り致すであらう。」

行平獨唱 『九重の城裡春の來ること早く』

百尺の樓頭月の落つること遅し』

合唱隊 「なれし都の忍ばるゝ、

櫻吹雪の朧夜を



嘶く駒に狩衣の  
袖に涙の移り香や」

(間奏)

「東五條をあとに見て  
外山の霞消ぬて行く  
加茂の流れの春風に  
わたるやあしの浪花湯」

(間奏)

「いなの笹原遠のけば  
鳴尾の沖や生田川  
磯馴松に影やどる  
月と假寝の須磨の浦」

行平

「都を去りて早や五月の詫住居、汐たく煙の朝夕を、戀もなければ憂さもなく、千鳥を友の世捨人、松ミしきかば、今歸り來んミ唄ひしは昔のこミ、立別れても明石潟、沖津白浪あミもなく、なミさけ渚の今の身の上。」

行平獨唱「わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に

藻塩垂れつゝ詫ぶと答へよ」

行平

「興ならぬ物語、恥しき繰り言であつたわい。」

松風

「やんミこミなき御身の上。」

行平

「在原の朝臣中納言行平。」

松風

「エ、在原の宰相ミのかミ(と言ひながら拜伏する)村雨ミの御聞きやつたか。」

村雨

「御いたはしう存じます。」

行平

「袖すり合へば移香の、其沙衣、綾ならぬ、搾らば霏。」

松風

「涙の種。」

行平

「何れは戀の迷ひ路か、そもじ二人の生育かたぢを、つゝます我にきかされよ。」



松風 「かたじけなき其お言葉、世にうらぶれの我等が姉妹。」

村雨 「姉なる人は名を松風。」

松風 「妹は村雨。」

行平 「して何處より参られしか。」

松風 「ぶしつけながら御物語いたしませう。」

(松風村雨の物語となつて舞ふ)

松風獨唱 『淡路島から千鳥は通ふ』

讃岐鹽飽島どころ』

(間奏)

合唱 『波は小松の岩に碎け』

寄せては返す島と島』

(間奏)

『手島小手島高見島』

與島小與島室木島

佐柳島に立つ煙

白笠島に雨晴れて

辨天島に入相の

鐘に埒の鳥小島

浮ぶ鷗に似たるかな』

松風 「讃岐鹽飽の大領時國の娘、島に育ちし姉妹が、波にゆられて落延し、潮の八重路の旅衣。」

行平 「しぶきや露にぬれ衣、戀ならではと思ひしに、いたいけな女同志、何か仔細の候ぞ。」

松風 「其仔細さは。」

松風獨唱 『沖の鷗に汐時きけば』

私しや立つ鳥波にきけ』

松風 村雨 「お恥しう御座ります。」



(と松風村雨話ん避けるやうにする)

行平獨唱「波にきけとはつれなしや

治まる御代は四海波」

「さ、やく戀の夫婦波

我はあし邊の片男波」

村雨獨唱「男波女波のいさかひは」

松風「我亡母の後妻の、母者人こそつれなしや、異腹なる弟の爲に、我等二人を憎み玉ひ、亡

きものにせんこ企て玉ふ。」

行平「さては、さうした仔細あつてか、心憎き女の振舞、して如何にして遁れ玉ひしよな。」

村雨「乳人の主人に牟禮の兵衛ひな申す忠義の男あつて、我等二人を隠してくれ。」

松風「暫時そこに忍びたるも、遂に打手に見現はされ、夜打を受けしは、去るい十六夜丑の刻。」

村雨「思ひ出すも恐ろしや。」(と、これより物語りの舞になる。)

合唱

「南無大慈大悲觀音崎や五剣山

津田の松原黄昏れて

黒雲掩ふ鬼ヶ原

牟禮の兵衛は男なり」

(間奏)

「遠からんものは音にも聞け

その松風の颯々たる

近くは寄つて眼にも見よ

その村雨の蕭々たる」

(間奏)

「さてもいちらしの松風村雨

矢叫びの音砕して



豊も燃ゆる血煙の  
丸山鼻を逃れ出で  
志波の沖より櫓拍子や  
月夜を忍ぶとまの影  
風のまに／＼流れ行く  
八重の汐路を今日九重の  
雲の上人行平朝臣  
夢も假寝の須磨の浦』

(間奏)

松風獨唱『涙川枕流る、浮寝には

夢も定かに見ぬぞなりける』

(三人合舞にて幕)

(第二場)

松風 狂亂

松風村雨住家の裏手、漁師の家の中央に突あげ窓、下手には繩暖簾をかけたる出入口、流木の神垣、よき所に磯馴松、正面は波の上の淡路島、秋の末、

幕内獨唱『かたみこそ今は仇なれ

これなくば、忘るゝ時も

泣く／＼に』

幕内獨唱『来るか／＼と濱に出で見れば

濱の松風音ばかり』

(幕明く)

村雨 「おいたはしい松風殿、宰相の君が都へ御歸りあつてこの方、身は空蟬の戀衣、心も亂れてあるに甲斐なき物狂はしの御振舞、わけて月夜の遠砦を聞くときは、過ぎし夜この偲ばれてか、あの立烏帽子にかたみの狩衣、寄する思ひも泪の種、いぢらしいあのおすがた、



心にかゝる事であるわい、オ、先のほぎより打ちかけた須磨晒、早う打ち上げて了ひませう。」

(村雨は家の内へ入る、オーケストラにて遠きわたの音聞ゆ)

「カ、カツコ、カ、カツコ  
カ、カツコ、カ、カツコ

コツ〜〜〜

テントン、テントン、トツテントン  
テントン、テントン、トツテントン」

(松風は押上げ戸をあけて半身を現はし、砧の音に聞き惚れたる如く無心に聞き居りしが、突然)

松風

「宰相様ッ……あゝ、在原の宰相様中納言様〜〜。」

(砧の音は依然として聞ゆ)

松風獨唱『風が戸叩きや

うつゝにあけて

月にはづかし我姿』

(松風は獨唱終りて靜かに戸を閉める、砧の音は猶ほ遠く近く聞ゆ、松風かたみの烏帽子狩衣を抱きて出て来る、)

松風 「あゝ、あれ、あそこに、あれ、はッ、ッ、あゝ、それ、それ、里の乙女の遠砧、オツ、其時、宰相様がお渡りの夜は、あの砧の音ささ、やぐ波の調べ、恰度今夜のやうな月の景色、松風、まちて居てか、野芒すつた狩衣は、尾花の末の露の片袖、ぬれた〜、その戀衣戀衣。」

(ト此科白の間に村雨忍び出で、泣く)

村雨

「あ、もし、松風殿、又お前は狂ふてかわ。」

松風

「何ぢや、くるふて、くるふて、くる〜〜廻る車は水車、は、は、は、それな、わしが大事の大じの中納言様は、この烏帽子かうあそばして、この狩衣を召されたお姿、オ



オはッ、は、はッ、、よう似た似たは、行平様に。」

村雨 「其人は都の住所。」

松風 「泪の種のこの二た品。」

松風獨唱 「かたみこそ今は仇なれ

是なくば忘るゝ時も泣くゝに」

合唱隊 「忍ぶ戀路を松蟲の

あへば口説摺蟲」

「露は尾花と寝たと云ふ

尾花は露と寝たといふ

あれ寝たといふ

寝ぬといふ」

松風殿御心をたしかに、なう松風ごの、エ、其狂はしい様は、お、お情なうムります。」

「すねて笑へば泣顔に

浮ぶは玉の白露や

尾花の宿に夢さめて

枕に通ふ松風に

哀れや秋の聲すなり」

村雨 「松風殿御心をたしかに、なう松風ごの、エ、其狂はしい様は、お、お情なうムります。」

松風 「エ、何、わらはが物狂はしいミ、もの狂ひミか、はッ、、何の、妾は中納言、行平の妻、

オ、中納言様宰相様ッ。」

合唱 「物狂はしや秋草の

尾花は風に亂れたり

萩の雫はほろゝゝ

散るはかるかや葛の花」



（問奏）

「君が形見とぬぎすてし  
其移り香の藤袴」

（問奏）

村雨獨唱「御いたはしや女郎花」

松風獨唱「情にすぎる朝顔は

露のひぬ間の別れかな」

村雨獨唱「残る河原の撫子は」

合唱「うす紅もいろさめて

秋の哀れをそゆるなり」

松風「思へば過ぎし三年の間、須磨の浦邊の片びさし、月漏る宿を訪づる。」

村雨「君を松風。」

松風「その風の音、波の音、月の光は昨日に變らねぎ。」

村雨「變りはてたるお前の身の上。」

松風獨唱「汐くむ袖に泪の乾くひまもなく

蓬と亂る黒髪の手枕に

うつゝに通ふ夢ならば醒めずもあれ

艸いろ絹の狩衣に移香の忍ばるゝ」

「形見こそ

あゝ、今は仇なれこれなくば

今は仇なれ、これなくば〜」

（静かに幕）



桃色鸚鵡

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

歌劇 桃色鸚鵡

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる

春の風をよめる



登場人物

朝日の國の王子

夕日の國の王子

國境の森の女神桃色姫

朝日の國の臣下 大勢

桃色鸚鵡

場所

朝日の國夕日の國々境の森

「桃色鸚鵡」

夕日の國の王子  
國境の森の女神

由良道子  
齋藤浅孝





「新色」  
 田中絹子  
 田中絹子

由 藤 野 洋 子  
 田 中 絹 子



合唱

「朝日と夕日の中間まんなかに

晝は花咲き鳥唄ふ

囀る鶯

ホー、ホケ、ホケ、ホーホケキヨー

桃色 鶯 囀







鶯獨唱 「わたしの好きな若様」

鶯獨唱 「わたしの好きな若様」

鶯獨唱 「わたしの好きな若様は

山は縁の松が枝に

櫻の花のあけぼのに

輝く朝日の上る國」

(間奏)

「わたしの好きな若様は

霞に匂ふ花の香に

唄ふ小鳥の賑かに

輝く朝日の上る國」

(間奏)

朝日の  
王子

「桃色姫。」

(姫は知らずして唄つて居る)

朝日の  
王子

「姫よ、桃色姫、く〜」

(姫初めて朝日の王子の来るに心付き、羞しさうに、周章しく、木の影に隠れる、王子は四邊を見廻はしながら)

朝日の  
王子

「鶯の唄ふよりも美しい聲で、心の底まで泌み通るやうな、あの唄の主は、國境の森の女神、桃色姫に違ないと思つて居つたのに、さうしたのであらう、心の迷ひ見ゆる、さうであつた、矢張り心の迷だ、心の迷ひに違ない、自分は、姫の神々しい美しい、情け深い御心にこがれて居る、縁の松が枝に夕月が宿りそめて、櫻の花の曙に目の覺むるまで、其の夢の中が、自分の一番楽しい天國である、夢を見て樂む果敢ない思ひが、いつ達するであらう、然しく、姫に對して夢を見るのは一種の罪惡ではあるまいか、いや、夢は自分の權利である、さうだ、自分は權利として夢を見て樂むより外に途がないのである。」



(と獨語して居ると鸚鵡が突然に)

鸚鵡

「私の好きな若様。」

(王子驚いてあたりを見廻はす)

王子

「ナニ、私の好きな若様ツテ、誰れだ〜。」

(あちらこちらを探すやうに歩く其中に又)

鸚鵡

「私の好きな若様。」

王子

「私の好きな若様!」

(と初めて鸚鵡に心付く)

王子

「桃が居る(鸚鵡の名) 姫が居らぬわけはない。」

(トちつと考へて居ると鸚鵡が唄ひ出す)

鸚鵡獨唱

「わたしの好きな若様は

山は緑の松が枝に

櫻の花のあけぼのに

輝く朝日の上る國』

(間奏)

(姫、わななくしながら木の間より牛身を出して王子に氣取られぬ様に鸚鵡に手まれにて制す)

「わたしの好きな若様は

霞に匂ふ花の香は

唄ふ小鳥の賑かに

輝く朝日の上る國』

(間奏)

(此唄を聴てゐる中に朝日の王子は嬉しさにニコ〜笑ふ)

王子

「ア、私の事を唄うて居るのだ、桃、桃よ、お前は、よい聲だ、誰に教はつた、能く覺わてくれた、エート、何を褒美に上げよう、ミルクを上げようか、パンを上げようか。」

鸚鵡

「私の好きな若様。」

王子

「よし〜、私はお前になんでも上げる、私の一番好きなものを上げよう、エー、何んにし



王 ようか、お父さまから頂いたヴァイオリンを上げようか、エメラルドのちりばめた刀を上げようか、ルビーの光る勲章を上げようか、いつそ、私の國を上げようか。」

(此話の間に、初は靜かに其中に賑かなオーケストラとなつてつゞいて合唱遠くより聞ゆ)

合唱 『朝日と夕日の中間に』

晝は花咲き鳥唄ふ

囀る鶯

ホーホケ、ホケ、ホーホケキョー

舞の羽衣

蝶々はヒラ、ヒラ

ちるは櫻よ

ヒラ、ヒラ、ヒラーと

花の吹雪はお下髪につもる

ヒラヒラヒラーと

赤いリボンも、ヒラ〜と

可愛い娘に春の風が吹く』

(唄ひながら輕きダンスにて朝日の國の臣下大勢登場)

臣一 「若様、此處こゝにゐられましたか。」

王子 「お迎ひか、早いではないか。」

臣二 「もう御時刻で御座います。」

王子 「イヤ、僕は未だ姫に遇はないのだ、一寸遇へば直ぐ歸る、いゝだらう。」

臣一 「桃色姫は御見ねにならないでは御座いませんか。」

王子 「さうだ、だから、見ねる迄此處に居るのだ。」

臣二 「それでは、いつお歸りになるか判らないのですか。」

王子 「姫に一寸でも遇へば直に歸る、だつて、僕の日課だもの、一日の中に一度でも遇はない

や……。」



(此間、姫、時々木立の影より王子をぬすみ見る)

臣三

「若様私共の落度になります、御時刻ですから、さうぞお歸りをお願いいたし升。」

王子

「困るなア。」

王子

(ミ思案してゐると又鸚鵡が)

鸚鵡

「私のすきな若様。」

王子

(王子は鸚鵡を見て喜んでゐる)

臣一

「オヤ。」

臣二

「オヤ、誰れが呼んだのでせう。」

王子

「桃だよ、可愛ゆいぢやないか。」

鸚鵡

「可愛ゆいぢやないか。」

王子

「オヤ、僕の眞似までする、ほんみに可愛ゆいぢやないか。」

王子獨唱

「可愛ゆいぢやないか」

可愛ゆいぢやないか」

(間奏)

合唱

「可愛ゆいぢやないか」

嬉しいぢやないか

ほんとに可愛ゆい桃色鸚鵡

人眞似こまね

酒屋の狐で

コン〜今夜はお嫁入

コン〜コンコンコン今夜はお嫁入」

(間奏)

(踊りながら、王子及臣下の退場するを、姫見送りながら出る、暫く無言)

姫

「わたし、なぜ隠れたのだらう、口惜しいこころをした、若様は、私をお待ち下すつたのだ

「僕は未だ姫に遇はないのだ、一寸遇へば直ぐ歸る」つて仰有つた、私、なぜ隠れたのだ



らう、心残りなこころをした、若様、私も遇ひたう御座います。」

鸚鵡 「妾も遇ひたう御座います。」

姫 「桃よ、能く言つてくれた、わたしの好きな若様。」

鸚鵡 「私の好きな若様。」

姫 「妾も遇ひたう御座います。」

鸚鵡 「妾も遇ひたう御座います。」

姫 「ホ、ホ、可愛ゆいぢやないか。」

鸚鵡 「可愛ゆいぢやないか。」

姫 「可愛ゆいぢやないか、可愛ゆいぢやないか。」

鸚鵡 「可愛ゆいぢやないか。」

姫獨唱 「可愛ゆいぢやないか」

(間奏)

「可愛ゆいぢやないか」

嬉しいぢやないか

ほんとに可愛い桃色鸚鵡

人真似こまね

酒屋の狐で

コン〜今夜はお嫁入

コン〜コンコンコン今夜はお嫁入」

(間奏)

(唄つて居る、と其中に夕日の國の王子が上手より登場、驚いて逃げようとする姫を呼止めて)

夕日の國の王子 「桃色姫、僕はお前にお願ひがある、私のお話を能く聞いて下さるでせうね、姫は、私の

國を見たいとは思はないの。」

姫 「エ。」

(間奏)



夕日の王子 「私の國を見たいでせう、それはく非常に美しい私の國は畫を見るよりも美しい國ですよ。」

姫 「そんなにお美しいの。」

夕日の王子 「それは美しい國ですよ、西山の頂には、茜染の夕日が、五色の雲にキラ／＼と映つて、森も、林も、水の色も、丁度繪の具皿を洗つたやうに、いろ／＼の色彩が、暮方の山寺の鐘の音に、だん／＼と沈むやうに、消れてゆく、晷を急ぐ鴉の鳴く聲が、灰色の空に響き渡るこ、それから、戀の、戀の生命のたそがれ時になる。」

(と靜かに、感情のたかぶるやうに話して來て、唄につゞく)

夕日の國の王子獨唱

「たそがれ時は好い時ぢや

色のあやめも亂されて

赤と白とは桃色の

姫の肌のうすぎぬに

つゝむまぼろし消ゆやらす

うつゝに迷ふ戀なれや

夢に夢見る戀なれや」

(間奏)

(さむじさうな歌が終ると、暫らく無言、其中に又靜かに語り初める、姫は悲しさに小さくなつて聞いてゐる)

夕日の王子 「姫よく其靜なる夕日の國には、過失がない、失敗がない、従つて後悔もなければ懺悔もない、凡てのものが……。」

姫 「若様、あなたのお國は、そんなに淋しいお國ですか。」

夕日の王子 「淋しい淋しいさういふよりは、靜かな、心持のよい國です、こゝに平和がある、こゝに安息がある、こゝに眠るべき夜がある。」

姫 「夜は悪魔でせう。」

夕日の王子 「イ、エ、夜は平和です、安息です、愛の泉が朝日であるならば、夕日につゞく夜は戀の



生命である、貴女はそれをお好になるに違ない。」

姫 「愛の泉が朝日ですつて、愛の泉は盡きないでせうか。」

夕日の王子 「勿論愛の泉には盡る時がある、然し、夜は戀の生命であつて、同時に其終極である、終極の先に何かありますか、そこに絶望もなければ希望のあるべき道理もない。」

姫 「私、そんな心細いお話は嫌です、もつこ面白い快活なお話でないさ、私悲しくなつて仕舞ますの、私淋しくつて致方がないの。」

夕日の王子 「淋しい、それは淋しいのではない、喜ぶべき平和なのです、憂鬱も煩悶も、或は驚愕も喜悅も、あらゆる感情は、其終局の目的たる、平和に到達したからです、私の國は平和な國です、靜な、さうしておだやかに丁度姫の御心のやうに。」

姫 「妾の心、平和でせうか、イ、エ違ひます〜妾は、——」

夕日の王子 「お待ちなさい、私は信じてゐます、姫の靜なる御心から見れば私の國は私の好な……」

鴉鳴 「私の好な若様。」

(こゝ又鴉鳴が叫び出す)

夕日の王子 「なに、私の好きな若様！」

鴉鳴 「私の好きな若様。」

(姫はハラ〜してゐる、夕日の王子は初めて鴉鳴に心付く)

夕日の王子 「桃よ、賢い桃よ、私の好きな若様つて。」

鴉鳴 「私の好きな若様、妾も遇ひたう御座います。」

夕日の王子 「妾も遇たう御座いますつて、いや、さうあらうとも、妾の好な若様、妾の好な若様、妾の好な若様。」

(喜びながら唄になる、姫はうろ〜して居る)

夕日の王子獨唱 「妾の好きな若様は」

鴉鳴獨唱 「わたしの好な若様は

山は縁の松が枝に

櫻の花の曙に



輝く朝日の上る國』

(間奏)

姫 「ア、違ひますく、桃よ、違ふ、く、やめてくれく。」

鸚鵡 「やめてくれ、く。」

姫 「あ、左様ぢやく。」

(鸚鵡の獨唱又初まる)

鸚鵡獨唱 『わたしの好きな若様は

霞に匂ふ花の香に

唄ふ小鳥の賑かに

輝く朝日の上る國』

(間奏)

(此歌の中程より夕日の王子「桃よ」桃よと小さい聲で其歌をやめさせる心持ちで呼んで見る

鸚鵡はかまはずに唄つて居る、王子は失望して、悄然として、無言に退場、姫は恐さうに見送る)

姫 「桃、よく唄つてくれた、夕日の國の王様は、あれ、あのやうに怒つてお歸りになつた、

御前のお蔭ぢや、たんこお禮をしませう、桃よ、妾はあんな陰氣な夕日の國は大嫌ひ、私のきらひな若様、私の嫌な若様。」

鸚鵡 「私のきらひな若様。」

姫 「さうぢやく、能く覺て置いてくれ、私のきらひな若様。」

鸚鵡 「私のきらひな若様。」

姫 「私のきらひな若様。」

鸚鵡 「私のきらひな若様。」

鸚鵡獨唱 『妾のきらひな若様は

風に木の葉の落る時

遠山寺の鐘がなる



西に夕日の沈む國

（間奏）

「妾のきらひな若様は

花の笑ひをしぼませて

唄ふ小鳥も眠らせる

西に夕日の沈む國」

（ミ唄ひ終つて鴉鳴を手の上に載せて）

姫 「桃や、今の歌を能く覺わて置いて下さい、よろしいか、頼みますよ。」

（此時鶯の鳴く聲空に響く）

姫 「アラ、桃や、鶯がないてよ。」

鴉鳴 「ホケキヨ〜、ホ、ホケキヨ〜。」

姫 「お前さんは鶯の眞似もお上手ね、鶯の鳴く聲は好きでせう、誰だつてすきだわね。」

鴉鳴 「私のすきな若様。」

姫 「アラお世辭がい、こゝ私うれしいのよ、それではね、私のきらひなのは何、知つて居て。」

鴉鳴 「私のきらひな若様。」

姫 「さうよ、夕日の國の若様。」

（姫は言ひながら鴉鳴を枝にとまらせる）

姫獨唱 「わたしのきらひな若様は」

鴉鳴獨唱 「わたしのきらひな若様は」

（朝日の國の王子家臣大勢つれて、此話の中に登場、又鶯の鳴聲聞ゆ）

朝日の王子 「姫よ、鶯がないて居る、うらゝかな空に、花の梢に柔い風が吹いて来る、そなたの髪の毛に、花瓣が、いづくにもなく舞ひ來るのも風情ではないか、無情う捨て玉ふなよ。」

（と言ひながら桃色姫のはにかんで居る肩に手をかけ、髪の毛をなでる、家臣が大勢居るので

姫は黙つてうつつむいて居る）

鴉鳴 「私のきらひな若様。」

姫 「アラ、桃、何を言ふの。」



鸚鵡 「私のきらひな若様。」

姫 「アラ、いやね、桃は、何を言ふのよ。」

朝日の王子 「私のきらひな若様つて……僕は姫に嫌はれて居たのですか。」

鸚鵡 「私のきらひな若様。」

姫 「桃よ、お前ひきいわ、もう澤山よ。」

朝日の王子 「いや僕は少しも知らなかつた、桃は正直だ、僕はきらはれて居たのだ。」

姫 「さうではないのよ、私少しも嫌つたことはないのよ。」

朝日の王子 「いや、さうでない、僕は毎日一度は一寸でも必ず姫を見なければ、何んだか物忘れしたやうに思はれて困ることは、能く知つて居つて下さるでせう、それに先刻僕が来たこと貴女知つて居つて。」

姫 「先刻知つて居てよ。」

王子 「それ御覽なさい、知つて居つて、僕に遇つて下さらないんでせう、確かな證據だ、僕は嫌はれて居るに違ひない。」

姫 「さうではないの。」

王子 「ではなぜ出ていらつしやらないの。」

姫 「だつて。」

王子 「だつてさうしたんです。」

姫 「わたし羞かしかつたんですもの。」

王子 「羞かしかつたつて、いや虚言だ、毎日遇つて居るんではありませんか、先刻に限つて羞かしかつたつて、そんな、人をだますことは、僕はきらひだ。」

鸚鵡 「わたしのきらひな若様。」

王子 「桃は正直だ、僕は桃に感謝する、受くべき恥辱を免れたのを感謝する、いや、僕は既に恥辱を受けて居つたのだ、姫、朝日の國の王子は、國境の女神にだまされて居つたのだ、僕はきらはれて居つたのだ。」

(姫こらへ得ず袖に面を掩ふて泣いてゐる)

鸚鵡獨唱 「私のきらひな若様は



風に木の葉の落る時

遠山寺の鐘がなる

西に夕日の沈む國』

(間奏)

『私のきらひな若様は

花の笑をしほませて

唄ふ小鳥もねむらせる

西に夕日の沈む國』

(間奏)

(此唄をきながら姫は嬉しさに笑顔になる、朝日の王子も自づと笑顔になつて、互に顔を

見合はす)

姫 「桃よ、桃は正直だ。」

王子 「桃は眞個に正直だつた、僕がわるかつた、くく。」

姫 「イ、エ、私は桃に感謝する、受くべき恥辱を免れたのを感謝する……。」

(笑ひながら)

王子 「もう、よろしい、私のすきな、愛する國境の姫、桃色姫。」

(と姫の手に接吻する)

鸚鵡 「私のすきな若様。」

姫 「さうぢや、くく、私のすきな若様。」

姫獨唱 『私のすきな若様は』

鸚鵡獨唱 『私のすきな若様は

山は緑の松が枝に

櫻の花のあけぼに

輝く朝日の上る國』

(間奏)



『私のすきな若様は  
霞に匂ふ花の香に  
唄ふ小鳥の賑かに  
輝く朝日の上る國』

(姫と王子を取巻いて臣下一同賑かな舞踊にて幕)

お伽  
歌劇 大江山



登場人物

源の頼光

阪田の金時

渡邊の綱

碓井の貞光

卜部の季武

辰巳の森の翁

酒呑童子

赤鬼、青鬼、大勢

姫 甲、乙、丙

場所

大江山々中

山

難波の土御門  
山崎の山崎  
山崎の山崎  
山崎の山崎

行手には山嶽壁は、深き谷間には流れの音聞ゆ。(暮明く)

(一)

『こゝは丹波の大江山

鬼共多く籠り居て

都に出ては人を喰ひ

金や寶を盗みゆく』

(間奏)

大江山



(二)

「源氏の大將頼光は

時の帝の勅り

お受申して鬼退治

勢よくも出かけたなり」

(問奏)

(三)

「家來は名高き四天王

山伏姿に身をやつし

けはしき山や深き谷

道なき道を上りゆく」

(問奏)

(此唱歌につれて、遊戯式に、源の頼光、碓井の貞光、阪田の金時、卜部の季武、渡邊の綱、

山伏姿にて登場)

頼光

「如何に金時、道なき谷の大江山、晝尙ほ暗き杉木立、雲吹き上ける風の音も、谷の流れ

金時

「な、これしきの山道を、鬼が棲うが蛇が居ようが、鐵より堅き我等の手足、雲の上ま

綱

「空より高い峰ありとも。」

貞光

「月が下から上らうも。」

季武

「雷様が御座らうも。」

金時

「頼光殿の四天王、かくいふ阪田の金時が、足柄山できたへたる、こぶしがぶんくうな

綱

「如何にもいつもながら金時の勇ましさ。」

頼光

「頼もしく思ふぞよ、左りながら、此度の鬼退治、恐れ多くもみかぎには、朝夕宸襟を惱



まし奉れば、一日も早く討平けたいものである、大儀ながら、今一息、サア上るさいたさう。」  
皆々 「心得申した。」

(進行曲)

頼光獨唱 『我等は都に名も高き』

源氏の大將頼光ぞ』

四天王 合唱 『それに従ふ勇士は』

共に慄悍決死の士』

鬼神にまさる四天王』

金時獨唱 『足柄山できたへたる』

阪田の金時こゝにあり』

貞光獨唱 『紅葉の谷や雪の山』

碓氷の貞光こゝにあり』

季武獨唱 『どいろく電、稻妻や』

我は卜部の季武ぞ』

綱獨唱 『京の九條の羅生門』

渡邊の綱とは我なるぞ』

合唱 『いざ〜ゆかん鬼退治』

いざ〜ゆかん鬼退治』

(間奏)

(進行中に岩の影より白煙上ると共に白髪のお翁現はる)

頼光 「ハテ心得ぬ、行手を遮る怪しの曲者。」

金時 「方々油断めさるな。」

老翁 「怪しものには候はず、我は都にほご近き、辰巳の森の翁なり、智勇兼備の頼光殿が此度

勅命によつて鬼退治せらるゝと聞き、妻子の敵君主の仇さ、都のものゝ大喜、左りながら、  
酒呑童子には變化の業も忍術も氷る方も役立たぬ、恐ろしき魔の術あるを知らざるか。只



だ之を討たんには、神便鬼毒の酒言つて、人間が飲む時は此上も無き薬なれど、鬼が之を飲む時は、忽にして飛行自在の力を失ふ、神の方便、鬼の毒、これぞ即ち、神便鬼毒の酒申す也、(と言ひながら一個の壺を渡す)これを頼光殿に進上いたす、此酒をば酒呑童子に飲ませたる上、思ふ存分にお討取りなさるがよろしい。」

(と言ひ終るに又白煙立登つて老翁の姿は消ゆる)

頼光 「ハテ、不思議やな、今眼前に現はれたる白髪のお翁より、神便鬼毒の酒を給はり、忝なれと思ふまもなく、忽ち御姿を隠し玉ふ、これぞ正しく、日頃信する男山八幡大菩薩に違なし、此神酒を下し置かれて、吾々の武運を守らせ玉ふか、難有や、かたじけなや、南無、弓矢八幡大菩薩。」

皆々 「守らせ玉へ〜。」

(皆々祈願して居るに谷の奥より女の聲聞ゆ)

女合唱 「父母戀し里戀し

都戀しやなつかしや

峯の猿を友として

谷の流れに衣洗ふ

父母戀し里戀し

都戀しやなつかしや

(皆々女の聲の聞ゆる方を仰ぎ見る)

金時 「我君お聞きなされましたか、父母戀し里戀し、都戀しやなつかしやと、悲しげに唄ふ女の聲。」

綱 「又も變化の現はるゝにや。」

貞光 「面白の行手。」

季武 「ナント愉快では。」

一同 「御座りませぬか。」

(皆々勇み出す)

頼光 「イヤ、かりそめに勇み立ち玉ふな、あの聲はまさしく女の唄ふ聲、強ちに妖怪變化さの



みは思はれず、(と暫く考へ)我れ都を出づる時、君の仰せを承はれば、池田の中納言國隆卿の一の姫も、俄に行方不明となり、上を下への大騒動、陰陽師の占によれば、此山の鬼に奪はれしにか、心にのこるは其姫のこころ、オ、早まつて怪我をさすまいものぞ。」

綱 「御注意深き御誠め、心得て御座ります。」

(此時女三人白服緋袴洗濯盥をもつて山の奥より再び唄ひながら登場)

女合唱 「父母戀し里戀し

都戀しやなづかしや

峯の猿を友として

谷の流れに衣洗ふ

父母戀し里戀し

都戀しやなづかしや

頼光四天  
王合唱 「父母戀し、里戀し

都戀しと言はるゝは

いづくの里の乙女子よ

見ればかよわきたをやめの

花の姿のいちらしや

女合唱 「君に大江の山深く」

四天王  
合唱 「あひに生野の道もなき」

女合唱 「谷の流れに衣洗ふ

水の行衛の定めなき

あすの命のあはれさよ

父母戀し里戀し

小段本非共(間奏)

四天王  
合唱 「都戀しの乙女子よ







女甲 「道にお迷ひなされた旅のお方。」

女乙 「今宵の宿を御尋ねぢやによつて。」

女丙 「御門の軒下なご、御案内しよつかご。」

女三人 「思つて居つた所で御座います。」

青鬼 「ナニ、道に迷ひし旅のものごな。」

赤鬼 「ごの道、冥途の旅に迷はねばならぬ奴原(間)彼是云ふ中に、酒呑童子殿もお見わにならう、先づそれ迄は、この人間共は我等が預つた、女共早う往て、御酒の仕度ぢや、酒呑童子殿にはお待兼。」

鬼 「サア往つたく。」

(と追立てる女三人未練を残して行かうとする)

酒呑童子 「イヤ、それには及ばぬ、酒呑童子、月に浮かれてこゝまでお運びぢや、ハテ、人臭い〜と思ふたら、これは又、近頃珍らしいお肴ご見ゆる、お前方は何者ぢや。」

(酒呑童子登場岩の上に腰掛ける、赤鬼青鬼いろ〜と介添をする、女三人左右に居ならぶ)

頼光 「私共は道に迷ひし旅のもの、貴方様が、音に名高き酒呑童子殿で御座りますか。」

金時 「如何様繪にあるやうな鬼の顔、耐らぬほご面白くなつて來たわい。」

酒呑童子 「道に迷つたご申すのか、ごこへ行かうご旅立つて。」

頼光 「生野を越えて但馬路を播磨に出づる旅の空。」

金時 「木の根、岩の角、雨降る中を艸枕、露を吸つても生きて居る山伏共の荒行は。」

綱 「かゝる深山の月景色百鬼夜行をまのあたり。」

季武 「お伽話を今こゝで。」

貞光 「實地に見るのも修業の一つ。」

頼光 「酒呑童子殿、ナント左様では御座らぬか。」

酒呑童子 「何かご言へご、露の乾ぬ間の命のこもがら、無情迅速、アレ〜見られよ、月を遮る浮雲の、邪魔立てしても、それも束の間、月の光は訝わわたる、酒呑童子はその月ぢや、月に浮かるゝ酒の酔、女共、盃に酒注がう。」

(女盃を運び酒を注ぐ)



酒吞童子「ア、よい心持だ、涼風がそよ／＼吹くわい、家來共酒の肴は、ナア、よいか、心得て居らうがな。」

青赤鬼「心得て御座る。」

頼光「幸の御酒宴、都の名酒を持参いたして御座れば、我等もお仲間入り、酒吞童子殿一酌参られては如何で御座る。」

酒吞童子「ナニ、都の名酒さな、それは忝けない女共、酌せい。」

女甲「心得て御座ります。」

(頼光より神便鬼毒の酒を受取つて酌をする)

酒吞童子「ア、ウマイ／＼、赤や、青や、酒がしみ込む肴がほしくてたまらぬわい、よいか、合點か。」

(と早く旅人を殺して其肉を出せと催促する心持)

青鬼「合點で御座る。」

(赤鬼と青鬼、顔見合して合圖して立上りうしろに廻つて一番手近に居た金時の首をつかむ)

金時「ア、これ何をなさる。」

(と其手を堅く握る青鬼赤鬼、痛くてたまらぬこなし)

青鬼「アイタ、、、ア、痛くはないぞ。」

金時「なに。」

赤鬼「痛くはないが、こいつ、人間離れの怪力よな、だが然し、何の道手料理の肴もの、酒吞童子殿がお待兼だによつて、これこの通り。」

(と又金時につかみかゝる、金時之を取つて押さへる)

頼光「金時、早まるな、酒吞童子がお望みのお肴、月に縁ある足柄山、踊つたり、／＼。」

季武「これは面白い、酒吞童子のお肴に。」

金時「よし心得た。」

(と青鬼赤鬼を左右に遠のけて立上る)

(一)

『足柄山の山奥に』



まさかりかついで金太郎

熊にまたがりお馬の稽古

ハツシドウくハイドウく」

(間奏)

(二)

『足柄山の山奥に

強力無双金太郎

けだものあつめて角力の稽古

ハツケヨイノコツタく」

(間奏)

(三)

『足柄山をあとに見て

君にめされし金太郎

都に住んでも戦の稽古

ソラコイ、ドツコイシヨく」

(間奏)

(と踊がすんで)

金時 「お肴してお笑艸、腕がなるわく。」

女甲 「金時殿の御物語。」

女乙 「面白いこゝで御座りました。」

酒呑童子 「金太郎は強力無双の男よ、それもよからう、一時の生命ぢや、うまい酒ぢやも一つ注ぎやれ、旅の山伏、其方も飲むか。」

頼光 「お相手いたさう。」

(女酌をする、此間に、青鬼赤鬼、綱の後に廻つて首筋をつかむ、綱きつこにらむ、頼光之を見て)



頼光 「オ、此度は渡邊の綱にお香をせよよか、綱は聞ゆる剛のもの、羅生門の物語、一段と興であらうがな。」

綱 「心得申した。」

(と立上る)

合奏 『京の九條の羅生門』

雨風はげし夜は深けぬ

綱の行手にア、ラ不思議

妖怪變化現はれて

兜のしころをむんづとつかむ』

(間奏)

『綱は聞こゆる剛のもの』

ぬく手も見せず切つて捨つれば

虚空を飛んで逃げてゆく』

(間奏)

『鬼の腕を唐櫃に』

三七二十一日の』

ものいみあけし朝まだき

綱の館を音づる、

育ちの乳母ぞいぶかしき』

(間奏)

『唐櫃見せよとせがまれて』

明けて口惜しき白煙

のぼると見れば片腕を

奪ひかへした變化の術



天地崩るゝ鳴神の  
雲にかくれてあともなし』

(間奏)

(青鬼赤鬼をからむだ此踊の間に、酒呑童子毒酒がまはつて苦しむ様子、頼光初め四天王酒呑童子につめよせる跡がすむと、綱は立姿のまゝ)

綱

「むざむざ取逃がしたる無念さは、渡邊の綱が一生の不覺。」

頼光

「今その敵に大江山、同じやからの酒呑童子、征伐せよこの勅命を蒙り、源氏の大將多田の満仲の嫡男、源の頼光。」

金時

「之に従ふ四天王には怪力無双の阪田の金時。」

綱

「渡邊の綱。」

季武

「卜部の季武。」

貞光

「碓井の貞光。」

皆々

「打殺さで置くべきか。」

酒呑童子「サテは聞及ぶ羅生門の祖母君を苦しめたるも汝等よな、物笑ひの返討、只だ一口に呑んで仕舞ふぞ。」

(ミ立上らうとするに、毒酒の爲立つこと出来ずウロウロして居ると鬼共の合唱になる)

鬼の合唱「ラ、ラ、ララ、ラツラツラ」

(此間に鬼を追廻はす、立廻り頼光酒呑童子を切殺し岩の下に其死骸を蹴落すに、忽白煙起り鬼の首岩上に立ち火焰を吐く)

合唱

『鬼の首とつた〜〜〜』

うれしや〜

鬼の首とつた〜〜〜

うれしや〜』

(幕)







登場人物

水屋	水	〇
鮎湯屋	鮎湯	〇
女學生 倉子	女學生	〇
同 由子	同	〇
同 室子	同	〇
同 文子	同	〇
オペラ節 瀧太郎	オペラ節	〇
同 雪太郎	同	〇
同 石太郎	同	〇
學生 峰吉	學生	〇
町娘 淺子	町娘	〇
中學生 島谷	中學生	〇
踊子 大勢	踊子	〇

巷

平舞臺正面斜めに奥深く二階建軒ツヰキ町家遠見、上手三分の二迄軒ツヰキ町家の書割、凡て小窓には美しき燈火かゞやく、下手路傍の青柳の下には鮎湯賣の屋臺店、上手路傍には氷店、夜の巷の景色。(幕明く)

氷屋獨唱「氷、氷、氷、つめたい氷

氷、氷、氷、つめたい氷

けづれば淡雪

とけたら嬉しい

夜の巷



あられとくだけで

敵にはかちわり

なさけは白玉

つよいは金時

氷、氷、氷、つめたい氷

氷、氷、氷、つめたい氷

一杯二銭の氷水

一杯二銭の氷水

飴湯屋  
獨唱

『飴湯、あめ湯

アツタカイ飴湯

あまくてぬくく

うまくてやすくて

一杯一銭

飴湯は衛生

冷ちや毒だよ腹下し

飴湯はぬくく、腹加減

飴湯、飴湯

アツタカイ飴湯

(女學生倉子、由子、登場)

倉子 「由子さんお待ちなさいよ、そんなに急ぐよ、追付けないのよ、妾、くたびれたんですもの。」

由子 「早くいらつしやいな、妾、のきが乾いてしかたがないんですから。」

倉子 「のきが乾いたつて、妾もさうよ、アラ一寸、由子さん氷店があつてよ。」

由子 「氷店、アラ、飴湯もあつてよ。」



倉子 「飴湯、飴湯なんか冬ののみものよ、此暑いのにあつたかいものなんかしかたがないわ、氷水をのみませう。」

由子 「さうね、然し妾、飴湯の方が好きなの。」

(と話しをして居る氷屋が唄ひ出す)

氷屋獨唱 「氷、氷、氷、つめたい氷

氷、氷、氷、つめたい氷

けづれば淡雪

とけたら嬉しい

あられとくだけで

敵にはかちわり

なさけは白玉

つよいは金時

氷、氷、氷、つめたい氷  
氷、氷、氷、つめたい氷

一杯二錢の氷水

一杯二錢の氷水

倉子

「氷屋さんがい、聲で唄つてよ、氷水に賛成なさいよ。」

由子

「氷水、おなかを悪くするこいけはないわ。」

飴湯屋  
獨唱

「飴湯、あめ湯

アツタカイ飴湯

あまくて、ぬくくて

うまくて、やすくて

一杯一錢

飴湯は衛生



冷ちや毒だよ、腹下し

飴湯はぬく、て腹加減

飴湯、飴湯

アツタカイ飴湯」

由子 「飴湯屋さんだつて、い、聲だわ、飴湯におつきあひなさいましな、エ、倉子さんい、でせう。」

倉子 「この暑いのに、あつたかいものなんか、第一自然に反するでせう、我々の主義は自然主義です、暑い時にはつめたいものを要求するのが眞理です、紅の唇が、丁度牡丹花の色の褪せたやうに乾いて居る時に、玲瓏として玉よりも清き一片の氷を含むにせよ、一寸想像する丈でも既に其心頭に冷かさを感じるでせう、況んやこれを實際に試みるに於てオヤです、氷にしなさいよ、い、でせう由子さん。」

由子 「倉子さん、暑い時に氷水をのまねばならぬといふのは、それは勿論自然の要求でせう、そこに何等の餘裕のない何事もその強い刺戟にあこがれて居るあなたから見れば、それは

考へる餘地はないでせう、然し強い刺戟には強い反應がある、強い反應は却つて其目的を没却するものです、私は徐ろに渴を醫すべき、飴湯の餘裕あるを愛します、倉子さん主義をまけて飴湯に賛成なさいましな。」

倉子 「主義をまけろつて、由子さん、それは慘酷よ、妾は主義に生きるのです、あなた妾にんなに親しく長く交際つてゐながら、私の主張も、生命も、主義にあるこゝを御存じないんですか。」

由子 「あなたは頑固ネ、飴湯をのむのに主義がいらいますか。」

倉子 「あなたは頑固ネ、氷水をのむのに主義がいらいますか。」

(と言ひながら眞面目顔に兩人自然に氷店と飴湯店の方に別れる)

氷屋獨唱「けづれば淡雪

とけたら嬉しい

敵にはかち割

なさは白玉



つよいは金時

氷、氷、氷、つめたい氷」

(こ軽く唄ひながら)

氷屋 「おき、申せば、お嬢さま方の御主張は一々御尤です、そこが即ち自然主義ごやら、冷いものを御好みのお方は氷店へ。」

鮎屋 「ぬくいものをお好みならば鮎湯を召上りませ。」

氷屋鮎屋 「何の御遠慮に及びませうサア、こちらへおかけ下さいまし。」

倉子 「それでは由子さん。」

由子 「倉子さん。」

二人 「自然主義だわねオホ、、、。」

(二人に別れて腰掛にかけ、氷水ミ鮎湯を、それく運んでくる飲んで居るこ向うからウ

アイオリンの音が聞いてオベラ節三人瀧太郎、雪太郎、石太郎登場)

氷屋 「おそろひで、もう御歸りですか。」

瀧太郎 「イ、エ、これから、始めるのです僕等の世界は今が暁です。」

倉子 「オヤ書生さん達意気な事を知つてゐますね。」

瀧太郎 「往來ばたで氷水なんか飲んで、君はごこの女學生ですか。」

倉子 「ごこでもいゝのよ。」

雪太郎 「瀧さん、ほつみき給へ、干涉するのは我黨の主義に反するぢやないか。」

石太郎 「さうだ〜。」

瀧太郎 「さうだ、僕が悪かつた、それでは君取消すよ、イ、だらう。」

倉子 「エ、いゝですこも、あなたがたは實に活潑ね、妾其活潑なごこが、大好よ、由子さん可愛い、書生さんでせう、あなたの理想ね。」

由子 「貴方は全體、ごこの書生さんですか。」

瀧太郎 「僕等ですか……。」

倉子 「一寸、由子さん、およしなさいよ、干涉するご主義に反するつて。」

瀧太郎 「イヤ、かまはないのです、僕等は商賣ですから、殊に同情者たるべき君等には敬意を拂



ひますから。」

由子 「それでは、ミこの書生さん……」

雪太郎 「僕等は苦學生です……オペラ節を生命として居るものです。」

倉子 「オペラ節つて。」

由子 「オペラ節つて、なに？」

瀧太郎 「オペラ節です、唄ひませうか。」

倉子 「き、たいわね。」

瀧太郎 「君唄はうぢやないか、僕がヴァイオリンをひくから、サア唄ひ給へ。」

(雪太郎、石太郎、唄ひ出す)

オペラ節「河原撫子かはらぬちぎり

風はともしびけしの花

結ぶねにしも水引の花

ほかに心は梨子の花

オペララララララララララララララララ

セロ、バス、ピアノ、ヴァイオリン

ハーブ、シンバル、コルネット

ピコロ、フリユート、タンポリン

ピオラ、バリトン、オルガン、オーボ、マンドリン

オペララララララララララララララララ

『戀の山吹なさけあやめ

闇もうれしいしのぶ艸

早おきな艸朝がほの花

ほんにわたしはばけの花

オペララララララララララララララララ

セロ、バス、ピアノ、ヴァイオリン



ハープ、シンバル、コルネット

ビコロ、フリユート、タンポリン

ピアノ、バリトン、オルガン、オーボ、マンドリン

オペラララララララララララララララララ

倉子 「面白いわね、歌だけですか、踊りはないの。」

石太郎 「踊りもあります、踊りませうか。」

由子 「踊つて見せて下さいな。」

瀧太郎 「では、君、僕がヴァイオリンを弾くから二人で踊つてくれ玉へ。」

(ミオペラ節につれて二人の踊りが始まる、それがすむと)

倉子 「大變面白かつたよ、大きに有難う。」

由子 「これからどこへ行くの。」

瀧太郎 「町を流しながら、行くのです、それではみなさん。」

石太郎  
雪太郎

「失敬します。」

(ミオペラ節を唄ひながら、三人退場、此時女學生室子洋傘を持って奥より、文子手提袋を持って上手より黙然として登場、兩人共水店の腰掛にかける)

水屋 「氷水でムりますか一杯二錢。」

(兩人うなづく氷水を飲んで黙て二錢づゝを置き立上る時、室子は手提袋を、文子は洋傘を、間違へて持つて上手と奥の方へ退場、此間絶えずお祭りの踊りのオーケストラ軽く遠音にて響く、此時又水屋と館屋の獨唱あつてそれがすむと、文子は洋傘を持つて居るのを忘れて、手さげ袋を探す心持ち、室子手さげ袋を持つて居るのを忘れて、洋傘を探す心持にて登場、双方行違ひに發見して奪ひ合ふ、滑稽なる無言劇あつて退場、其様子を水屋と館屋が見送つて)

水屋 「なんのこつたい馬鹿にして居ますな。」

倉子 「ハッ、、、變な人たちねわ。」

(音楽につれて、男學生峰吉酔つて唄ひながら登場、女學生倉子と顔を見合す)

峰吉 「いよー、お嬢さん、氷水ですか、僕も一杯御馳走になりませうか。」



(倉子ツンと横を向いて知らぬ顔をする)

峰吉 「いやにすまして居るではありませんか、まるで、馬耳東風といふ態度ですな、我輩の如き貧乏書生を顧るのは正に判然と恥辱であるといふ顔付ですな、余輩聊か酒に酔つて居るに雖も、古い文句だが、醒ては握る堂々天下の権です、さうです君、僕に同情してくれませんか。」

(峰吉倉子に近づく此時軽い音楽につれて町娘浅子登場)

浅子 「早く行かないよ、寶塚の歌劇が見られなくなる、何といふ氣せわしい事です。」

(唄になる)

浅子獨唱 『私しや歌劇が大の大の大好きや

ド、レ、ミ、フワ、ソ、ラ、シ、ド、ド、ド

あれ〜ピアノが、ピアノ〜ピアノが

早く行きますせう寶塚』

(唱ひながら急ぎ足に行かうとする最前から見送られて居つた峰吉が呼び止めて)

峰吉 「ア、もし、お嬢さん、あなたは、そんなに歌劇がお好きですか僕も大好き。」

唄 『私も歌劇が大の大の大好きぢや

ド、レ、ミ、フワ、ソ、ラ、シ、ド、ド、ド

あれ〜ピアノが、ピアノ〜ピアノが

早く行きますせう、寶塚』

「サア僕と一緒に行きませう」

浅子 「失禮ですが、私はいそぎますから御免下さいまし。」

(行きかける)

峰吉 「マ、マ待ち給へ君」

唄 『あなたは歌劇がお好きでせう』

僕も歌劇は三度の飯を四度たべても大好きです

これが即ち、好いた同志と言ふでせう』



浅子獨唱「アラ、いけすかない書生さん

どこのどなたか知らないく

私しやあなたのやうなお酒臭い男の人は嫌です」

峰吉獨唱「お酒臭いと仰有るか

それや聞ねませぬお嬢さん

僕はお酒が大嫌ひ

どんなものかと一寸一杯ためして見たら

そら、こんなに酒臭い

お酒はくるしいく助けて下さいお嬢さん」

(と言ひながら妙な形をして袖をつかむ)

浅子獨唱「あらいやです

およしなさいよ

いけすかない

きらひな人

峰吉獨唱「ほんとに可愛ゆいすきな人」

浅子獨唱「きらひな人」

峰吉獨唱「すきな人、お嬢さん

弱きものよ、汝の名は男なり

と言ふことを知つて居りますか」

浅子獨唱「弱きものよ、汝の名は女です」

峰吉獨唱「男です

論より證據

これこの通りです」

峰吉獨唱「文」(と拜むまれをする)



浅子獨唱「女です」

論より證據

これこの通りです」

(と逃げゆく、あと追かける)

水屋 「いやらしい書生さんですここ。」

倉子 「墮落書生でせう。」

鮎湯 「まるで色狂氣子、あゝいふ書生さんばかりでは學校の先生方も、さぞ、お骨が折れるでせう、ネ。」

由子 「あんな酒呑書生は、學校へなんか行つてはゐないんでせう。」

倉子 「學校へなんかゆく資格はありませんわ。」

(と話の中に中學生島谷急ぎ足に登場水屋の前を行過ぎようとする)

倉子 「ア一寸、島谷さん、あなた、ここへ被入やるの。」

島谷 「倉子さんでしたか僕はもう歸るのです。」

由子 「島谷さんごちらへ被入つたの。」

島谷 「日曜日ですから箕面公園に散歩に行つたのです。」

倉子 「箕面公園へ散歩に？、貴方のお好きな寶塚の歌劇へはなぜ被入らないの。」

島谷 「歌劇ですか僕は見たいんですけれど……僕の學校では先生が歌劇を見てはいけないつて言ふんです。」

倉子 「貴方んみこころの學校でも歌劇を見てはいけないつて。」

由子 「さういふ理由でせう、不思議だわ、子。」

島谷 「僕等にも其理由は判らないのです、頼らしむべし知らしむべからずさういふのが僕の學校の先生の主義ですから。」

倉子 「それは、かうなのよ、私所の兄さんが、さういふてたの、なんでも學校の運動會があつた時に、運動會を見るよりも歌劇の方が面白いからつて寶塚へ行つたつて、それで先生が大變お怒になつて、もう再び歌劇を見ることはならないんですつて。」

島谷 「僕の學校には、もつとひびきい連中があつて學校へ行くつて宅を出て、其實學校へ行かな



くつて歌劇を見に行くこいふ様な薄志弱行の徒が多かつたから、そこで先生が驚いて、断じて歌劇を見に行くこいふはならぬこいふ嚴命を下すやうになつたのだと言ふこいふ事です。」

由子 「それは學生さんがわるいと思ふわ、學生にあるまじき行爲ですもの、學ぶ時は一生懸命に學び、さうして遊ぶ時には高尚に遊ばなくてはいけないと思ふわ、さういふをするから罪のない歌劇に迄飛んだこいばつちりが来るのよ、歌劇のお方にだつて可愛さうだわね。」

倉子 「いや、まだ外にも理由があるつて宅の兄さんが言ふてたの、それはかうなのよ、歌劇は時代の要求に生れたる新興藝術であるから現代の青年士女は争ふて之を賞翫する、其結果として歌劇は青年士女の唯一の樂園となる、青年士女が一堂に集まる機会が多くなるこい、そこに自然こい、危険が伏在する恐れがあるこいふのも又一の理由ださうなの。」

由子 「神経過敏だわね、第一、寶塚の經營は、一家族打連れて遊びに行けるやうに、高尚に、家庭本位に、清新なる娯樂場として、他に眞似の出来ない設備が整ふて居るのに、そこに危険が伏在するものだと言ふならば、他に安全な場所があるでせうか、何こいふ常識のない話でせう。」

倉子

「風聲鶴唳でせう。」

島谷

「學校の先生つて、それはみんな妙に神経過敏です。」

由子

「神経過敏すぎるは、そんなこいふ言ふて居つた日には、今に中學校の生徒は電車へ乗つて學校へ通ふてはいけない、こんな遠い處でも歩かなくてはいけない、電車の中には女學生も乗つて居れば、綺麗なお嬢さん方もウジ／＼乗つて居る、それに接近するこい、そこから危険が伏在するこいふ結論になるでせう、若し果してそれが事實であるこいせばです中學校の先生から見ると學生さんは殆んど薄志弱行の徒にあらざれば、一種の色情狂見られて居るこいはれても致方がないでせう、更に詳しく言へば、要するに學生は侮辱されて居るのです。」

倉子

「さういふ意味にこいつては、それは慘酷よ、つまり先生は老婆心なの、所謂安全第一主義なの、多數の若い血のもゆるやうな學生さんをお預りなさるんですもの、ヒステリックになるのが尤だつて宅のお父さんは言ふて居つたの。」

由子

「然し、此問題は現代の思想問題として大に研究すべき價值があるつて宅の兄さんも言ふ



て居つたの、丁度、之を例ふれば、カステラと言ふ菓子は滋養分もあればおいしくもある、誠に青年士女にふさはしいよい菓子である、然るにそれをあやまつて食べ過ぎた、其結果、胃病患者が出来た、そこで驚いて、カステラを食べるに胃病になる恐れがある、もう断じてカステラを食べてはならないと堅く禁じたせせば其結果はさうでせう、バチルスのかつについて居るあんころがある、不衛生的の牡丹餅がある、さうしても甘いものを断つこと出来ぬ青年は、勢ひ、千日前や、ルナパークや、そのバチルスのあんころや不衛生の牡丹餅に走るにせざるを得ない、さちらが恐ろしいでせう、カステラの食ひ過ぎは間違つた處で胃病になる位ですけれども、バルチス的なあんころ牡丹餅まで、生命にかゝる恐れがある、それが學校の先生にはおわかりにならぬと言つて憤慨して居つたのよ」

島谷 「さうするに、僕等は、もうカステラも食べられない、鹽ばかりなめて居れば、それで十分だと言ふ哀むべき境遇に居るんですネ。」

倉子 「さうなの、宅の兄さんも言ふて居つたの、もし我國家に弱點ありませば、それは現代の教育であるつて。」

由子 「大層六ヶ敷なつたのね、そんな六ヶしい議論になるに私共の畑ではないわネー。」

島谷 「いや、倉子さんの言ふ通り、ほんきに、國家の弱點は現代の教育にあるかも知れんよ、これから又、高等學校の試験に來たら泣きたくなるからね。」

由子 「ほんきに同情するわ。」

水屋 「一寸お嬢さん方御覽なさいナさつきの酒酔の書生さんが、又あのお嬢さんを追かけて來ますは。」

館屋 「アラ、オペラ節の書生さん達も歸つて來るに。」

倉子 「マア賑かに大勢で何か唄つてくるのよ。」

由子 「サア倉子さん私達も、餘り遅くなるにいけないから歸りませう。」

倉子 「それでは水屋さん、こゝにお金を置ますよ。」

(と行きかけると學生峰吉、淺子、其他大勢が唄ひながら再び登場「私しや歌劇が大好き」のコーラスにて幕)



大正六年十月廿五日印刷  
大正六年十月廿八日發行  
大正十二年七月廿九日再版

定價 金貳圓

著者 小林 一三

兵庫縣川邊郡小濱村川面字五及田  
四番ノ一四

發行者 吉岡重三郎

株式會社三有社  
大阪市西區土佐堀通四丁目五番地

印刷者 飯田彌之助

寶塚少女  
歌劇團  
著作權興  
行權所有

發行所

兵庫縣川邊郡  
寶塚榮町

寶塚少女歌劇團

攝子大阪四六二六四番



228  
3231



終

